

「すまない。でも俺がこのことを知ったのは3日前のことなんだ。亜希子は前回ここに来たときにはもう、このことを知っていたようだ。亜希子がどうしてここに居たがるのか、深く考えなかった俺が悪かった。亜希子はずっと一人で苦しんでいたんだ。亜希子に優しくしてやってほしい」

「勿論よ。明日は朝から部族の会議があるから、それが終わったら、亜希子のところに会いに行くわ。でも、亜希子には、わたしがそのことを知ったということは隠しておくわ。わたしには果たさなければならぬ事があるから、いま、現実世界の中で姉妹の愛に浸る余裕はないの。一緒に生活することはできないわ。でも、亜希子のことは必ず守ってみせるわ」

「祐子、済まない。本当は俺がここに居て、君たちを守らなくてはならなかったのに、許してくれ」

「わかっているのよ。あなたには、この世界でしなくてはならないことがあるのよ。わたしたちは、それが達成できるまでは、一緒に生きることは許されていないのよ。わたしは亜希子もそういう任務を背負っている様な気がする。亜希子はこれから、自分の道を歩み始めると思うの。いつも近くに居てはあげられないけど、わたしはあの子を見守るわ」

「俺も時空間的には遠くに居るけど、意識は直ぐ近くに居るから、精一杯君たちを守るように努力するよ」

「ありがとう、あなた」

「そうだ、祐子、君の本当の名前は由（よし）という字に宇宙の宇って書いて由宇っていうんだ。亜希子の本当の名前は亜紀、“き”の字が紀元前の紀だ。亜希子はみんなに、自分の事を「アキ」って呼んでほしいと言っていたよ」

「わたしは、あの子が自分でわたしに「アキ」って呼んでほしいって言うまで、亜希子って呼んでいるわ。あの子が自分で素性を明かすまで、双子だということも知らない振りをしているわ」

賢は、祐子が落ちていて衝撃的な事実を受け止めてくれたことに、胸をなで下ろした。

亜希子が身支度を調べて部屋に居ると、康介がやって来てドアをノックした。

「おはようございます。元気になった？」

「おはようございます。わたくしはずっと元気ですわ」

「そう、それはよかった。じゃ、出掛けようか？」

亜希子は康介を頼もしく感じた。亜希子にとってアパートでの初めての朝だった。昨日見ている筈なのに、すべてが新鮮に思えた。ラウンジを横切るときに、一人の西洋人の男性とすれ違った。康介が「Good morning」(おはよう)と云うと西洋人も「Good morning」(おはよう)と言った。亜希子も直ぐに「Good morning」(おはようございます)と言って会釈した。西洋人は「Are you a new face, aren't you.」(新顔ですね)と言った。亜希子は「Yes, I am」(はい)とだけ応えた。西洋人はにっこり笑って、握手を求めた。亜希子は躊躇せずにそれに応えた。ずっしりと重い感じのする手だった。

ふたりがホテルに着くと、既に3人がエントランスの前に出ていた。お互いに元気よく挨拶を交わすと、梓が言った。

「フライトは2時半です。12時半には空港に行きたいと思います」

康介が言った。

「大丈夫っすよ。まず、食事をしましょう。今、8時だから、9時半にはホテルに戻れます。アパートの近くのレストランに案内します。アキさん、これからよく行くことになるところですよ」

康介の連れて行ったのは、カウンター席と3つの角テーブルのある、小さいが小綺麗な食堂だった。現地人の男性が経営している店だと、康介が言った。よくこの食堂を利用していると見えて、店主が愛想よく挨拶をした。康介は上機嫌でそれに応えていた。康介がスワヒリ語で何か話し掛けると、店長が大きな声で笑った。全員カウンター席に着くと朝食のメニューから1品ずつ選んだ。康介はサラダとスープとポテトフライの簡単な食事を頼んだ。香川も同じものを頼んだ。亜希子はメニューの一番下に書いてある料理を頼んだ。

「これにするわ。きっとおいしいですよ」

賢と梓は亜希子と同じ料理を頼んでみることにした。分厚い牛肉の料理だった。皿の上にはポテトフライが山のように盛ってある。賢と梓は、それを見ると一気に食欲が無くなった。亜希子は

「おいしそうですね」

と済ました顔をしている。康介と香川がくすくす笑った。結局、3人は半分も食べることができなかった。いささか食傷気味になった賢は、亜希子に言った。

「亜希子、あんまり食べ過ぎるなよ。今度会ったときに、丸くなっていて、見分けが付かないと困るからな」

と冗談を言った。亜希子は流し目で賢を見た。その目に涙が光っていた。食事を終わると、一行は一旦ホテルに戻り、賢と梓がチェックアウトをした。スーツケースを引いて戻って来た賢と梓に向かって、香川が言った。

「僕は、鹿島さんと一緒にもう少し、亜希子お嬢様の様子を伺っています」

賢が応えた。

「亜希子のこと、よろしく願いいたします。何不自由のない環境の中で育った女性です。アフリカで生きることは並大抵じゃないと思います。香川さんや鹿島さんのお力がなかったら、生きてゆくことさえ難しいと思います」

「賢さん、ぼくは近いうちにナイロビからキガリに移動しようと思っています。希土類とレアメタルです。祐子お嬢様が可能性を見いだせそうだと分かったら、直ぐに本社に支援を頼みます。覚られないようにやります。ちょっときわどいですけど」

「祐子のやろうとしていることに、水を差すような結果にならないように、くれぐれもよろしく願いいたします」

「はい、心得ています」

鹿島がソファから立ち上がって近づいて来て言った。

「暫くアキさんに会えなくなるっしょ。時間になるまでアパートに居ま

すっか？」

亜希子は自分がアパートの部屋の鍵を開け、先に中に入ると、振り返り

「さあ、皆さん、どうぞお入りになってください」

と言って、にっこり微笑んだ。賢たちは銘々

「失礼します」

と言って、部屋に入って行った。亜希子に促されて全員がソファーや椅子に座ると、

「皆さん、コーヒーでよろしいかしら？」

と亜希子が明るい声で聞いた。全員頷いた。亜希子は昨日買ったルワンダの粗挽きコーヒーを濾紙に入れ、コーヒーメーカーにセットすると、ミネラルウォーターを入れて電源をONした。

「みなさん、5分ほど待ってくださいね。さあて、ルワンダのコーヒーのお味はいかがかしらね」

亜希子がみんなの居るところに来ると、電話が鳴った。音が小さい。亜希子はベルがどこで鳴っているのか少しきょろきょろしたが、思いついたようにキッチンのカウンター横の壁に行き受話器を取った。

「亜希子さん、おはよう。わたし、祐子よ、1時頃までにはそっちに行けそうよ」

亜希子の顔がぱっと明るくなった。梓が立ち上がってキッチンに行き、カップボードから全員分のコーヒーカップやシュガーなどを出して、準備し始めた。

「お姉様、おはようございます。うれしいですわ。でも、どうしてわたくしのお部屋がおわかりになったのかしら？」

「賢さんから聞いたわ。鹿島さんの名刺をいただいていたので、アパートに電話をしたのよ。そのアパートは、昼間は外からの電話を一旦事務員の方が受けるのよ。それであなたの名前を言ったの。そうしたら繋いでくれたわ」

「お姉様、とっても嬉しいですわ。わたくし、12時から2時半までは賢さん達をお見送りに空港に行っています。祐子お姉様、3時頃にわたくしのアパートにいらしていただけますか？」

「分かったわ。今日は、あなたとふたりきりでお話ししたいのよ。あなたのお部屋がいいわね」

「はい、わたくしのお部屋は211号室です。お待ちしております」

「じゃあね」

「あの、もしもし……祐子お姉様からです。切れてしまいましたけど」

賢が聞いた。

「祐子は何と言っていた？」

コーヒーの香ばしい匂いが部屋いっぱい広がっている。

「はい、今日わたくしのお部屋にいらしていただけるとおっしゃっていました。ふたりきりでお話ししてくださるって」

亜希子は嬉々として応えると、キッチンの方に行き、コーヒーメーカーからポットを外し、梓の準備したカップに注いだ。梓がそれを男性達の座っている席に運んだ。全員で、亜希子のこれからの活動について話し合った。康介が聞いた。

「アキさん、どうして、亡くなってしまった人のために働くんですか？それよか、生きている人のために働いた方が、ずっと役に立つと思うんですが……」

「はい、わたくしは、亡くなってしまった方の意識と会話ができるようなのです。ここでは大勢の方々が亡くなってしまいました。その人達が自分が死んだのかどうかさえ分からずに、今でもまだ苦しんでいるのを知って、一人でも多くの人を助けてあげたいと思ったのです」

「アキさんも、やっぱ、死後の世界があると思ってるっすね。俺にはわかんないけど」

「はい、死後の世界はあります。でも、わたくし達には直接は分からないようになっているのです。ねえ、あなた、あなたから説明していただけますか？」

亜希子は賢に振ってしまった。賢が言った。

「鹿島さん、知っているじゃないですか。確か、青森の事件の時にも、お話ししたような気がします……」

「ノー、ノー、聞いていませんね。賢さん、死後の世界は本当にあるんですか？」

「もともと、生前も、現世も、死後も無いんですよ。人間の意識が作り出した幻影のようなものですよ。人間は生き通しだから、死後の世界はあると言えばあると云うことになるんです」

「オー、ノー、まったくわかりませーん。とにかくあるんですね。だから、死んだ人のことを助けたいと・・・助けないと、どうなるんですか？」

「ずっと長い間、苦しんでいることになります。本当はいろいろなことを学んで、そして、元の自分を成長させるのが理想なんですけど、それができなくなるんです。だから、突然死んだり、恐怖の中で殺されたりすると、どこか蟻地獄のような心の穴に嵌ってしまって、その場所から抜け出せなくなる人もいます。そういう人たちに自分たちの状態に気付かせてあげるのです。意識の持ち方でその穴から出て来られる事を教えてあげて、正常な魂の歩むべき道に戻してやるんです。亜希子はそれを助けてやろうとしているんです」

香川が言った。

「なんか、分かったような、分からないような、難しい話ですね」

「賽の河原とか三途の川とか、昔からいろいろ謂うでしょう。ああいう喩えで考えればわかりやすいでしょう。でも昔からある喩えを使うと、そのイメージにとらわれてしまって、それが現実化してしまうから、僕のような説明の仕方をしたんですよ」

康介が言った。

「分かったっす。「水子みたいな幼い子供が亡くなると、その子はそれから何をしたいか分からないから、賽の河原で石を積んで遊んでいる」って前にだれかから聞いたっす。坊さんが、それを諭して、死んだことを教えてやる・・・あれっすかね」

「そう、そういう様なことです」

康介はようやく、理解した。香川も納得した様だった。康介が言った。

「アキさんは寺や教会の無い、一匹オオカミの尼さんになる様なもんですね」

「オオカミではありませんわ。一羽の鶴とか、言っていたきたいわ」
「わっはっはっはっ、まあ、そう思っていてくれればいいでしょう」
「あなた、笑わないでください。わたくしは真剣です」
「ごめん、ごめん、オオカミじゃなくて鶴というところが面白かったんだ。亜希子はどこにでも飛んで行けるから、鶴が似合っているかもしれないね」

時々冗談を交えながら、5人は歓談した。いよいよ出掛ける時刻になった。部屋を出る前に、亜希子は全員に感謝の言葉を伝えた。

「みなさん、本当にありがとうございました。わたくしの為にこんなにさせていただいて、なんとお礼を申し上げていいかわかりません。わたくしは、みなさんのご期待にお応えできる様に一生懸命がんばります」
全員が拍手をして、亜希子を励ました。

12時半過ぎに空港に着いた。搭乗手続きを済ますと、5人は15分ほど椅子に腰掛けていた。亜希子が賢の右隣に座り、賢の右手をずっと握っていた。誰も言葉を口にするものはなかった。賢は心で亜希子に話しかけた。

「亜希子、しっかり生きろよ。おまえは離れていても、いつもおれと一緒にだ。愛しているよ」

亜希子も賢の心の言葉が聞こえた。

「あなた、愛しています。永遠に」

賢の目から涙が流れた。無性に悲しくなった。亜希子の瞳からも涙が溢れ出た。

亜希子、鹿島、香川の3人は賢たちが荷物検査のゲートに消えるまで見送っていた。賢たちの姿が見えなくなると、鹿島と香川は引き返そうとした。亜希子が言った。

「もう暫くの間、ここに居させてください。祐子お姉様がお見えになるような気がするのです」

賢たちの姿が見えなくなって30分ほどすると、人々がざわざわと動く気配がした。入り口の扉が開いて一人の女性が現れた。何人かの人々がその女性の周りを囲む様に集まっている。女性の背後には灰色の制服を

着たパイロットの様な男性が二人従っている。周りを取り囲んだ人々に女性が声を掛け、握手をしながら、亜希子達の方に向かって進んで来た。祐子だった。祐子が亜希子の近くに立つと、その周りに人垣が出来た。

「お姉様！」

「亜希子さん、来てしまったわ。もう、行ってしまったのかしら？」

「フライトは2時半です」

「あと30分ね。亜希子さん、こちらにいらっしゃい、一緒にお見送りしましょう」

3人は祐子に連れられてレストランの横から見送り用のデッキに出た。鉄の柵があって少し見にくかったが、待機している飛行機が1機あった。あれが賢たちの乗っている飛行機に違いないと康介が言った。やがて、飛行機が動き出した。テイクオフのポイントまで移動すると、そこで飛行機は停止していた。祐子がポケットから小さくなったボールを取り出した。

祐子はテレパシーで話しかけた。

「あなた、聞こえますか、空港の見送りデッキに立っています。お気をつけて、さようなら。必ず会えると信じています。あなた、愛しています」

亜希子も賢にテレパシーで話し掛けた

「あなた、さようなら、気をつけてくださいね。あなた、愛しています」

出国ゲートを抜けると、賢は搭乗が開始されるまで、出発ゲートで待った。賢は「なぜ何時までもこんなゲートがあるのだろう」と、しくみに生きる人間の哀れさを思った。梓は、ノートを手にして出発ターミナル内を見て廻った。やがて搭乗が開始された。梓が窓際で、賢が通路側に座った。テイクオフの時、空港の管制塔が見える位置だった。飛行機が動き出し、滑走路の端に止まると、梓が言った。

「賢さん、見てください！あそこ、ほら空港ビルの屋上、柵の向こう、真ん中あたり、祐子さんと、亜希子さんです。他の人たちも居ます」
賢には誰だか判別できない。梓の遠視能力だった。はっきりと祐子と、

亜希子を見分けていた。賢の脳裏に声が響いてきた。

「あなた、聞こえますか、空港の見送りデッキに立っています。お気をつけて、さようなら。必ずまた会えると信じています。あなた、愛しています」

祐子の声だ。亜希子の声も聞こえてきた。

「あなた、さようなら、気をつけてくださいね。あなた、愛しています」

賢は先ず、祐子に話し掛けた。

「祐子、また会おう、君が元気でいてくれることを祈るよ。永遠に愛しているよ」

亜希子にも話しかけた。

「亜希子、がんばれよ、必ずまた会える。身体には気をつけるのだぞ、愛しているよ」

梓が言った。

「賢さん、みんなが手を振っています」

賢と梓は小さな窓から、二人の女性の安全と成功を祈って手を振った。

飛行機はジェット噴射を開始し、離陸した。

祐子が康介の住んでいるアパートに来るのは初めてのことだった。広いラウンジを通り抜けるとき、事務員が祐子に気付いて急いで事務室から出て来た。亜希子に軽く会釈すると、祐子に向かって頭を下げた。

「*****」(ママ、ようこそこのアパートにお越しくございました)

「*****」(ありがとうございます。あなたはどこの出身?)

「*****」(はい、カノンペです)

「*****」(空港の近くね、今は町に住んでいるの?)

「*****」(町の外れのアパートに住んでいます)

「*****」(お仕事頑張ってるね)

「*****」(ありがとうございます)

祐子がそっと事務員の肩に手を触れた。事務員は嬉しそうににこにこして一歩身を引いた。先ほど一緒だった二人の護衛も祐子の後に附いて亜希子の部屋まで来た。祐子は護衛にドアの外で待つように言うと、亜希

子の招きに従って部屋の中に入った。

「亜希子さん、素敵なお部屋ね。それに安全そうだし、ここなら一人で生活することもできるわね」

「はい、お姉様、皆さんに大変お世話になりました。それに、鹿島さんがこの2階の反対側の端に住んでいますから、とても心強く感じます」

「そうなの!?!それなら益々安心ね。まあ、暫くはキガリの町でも見物して、のんびり過ごすのね」

「お姉様、ありがとうございます。そちらのソファーにお座りになってください。お姉様、ルワンダのコーヒーはいかがですか？」

「ありがとう。もう、ずっとここに住んでいるみたいね」

亜希子はコーヒーの用意をしてから、祐子の近くに行った。

「わたしも時間のあるときは、あなたに連絡するわ。一緒にお食事をしたり、いろいろなお話をしたりしましょう」

「はい」

「亜希子さん、あなたは苦しんでいる人たちを助けたいと言っていたわね。何をしようと思っているのかしら？よかったら話してくださらない？」

「あのジェノサイドで、とても沢山の人たちが亡くなりました。わたくしはこの前こちらに来たとき、賢さん達とジェノサイド・メモリアルに行ったのです。多くの人々の亡骸を見ました。そして、そこで、亡くなった方々がまだ、その場に彷徨っていることを知ったのです。賢さんと一緒に瞑想して、何人かの人たちに、既に亡くなっていることを伝えました。一部の方は理解しましたが、ほとんどの方々は、わたくしの話に耳を貸そうともしませんでした。その苦しみの状態から抜け出す方法を知らないのです。あまりにも哀れで、わたくしは、辛くて立っているのもやっとなりました。この人達を救おうと心に決めたのです」

「それは、勇気のある決断ね。残酷な仕打ちを受けた人たちの亡骸を見ても、大丈夫なの？むごたらしい殺され方をした人たちが沢山いるのよ」

「今は、自信がありませんが、必ず受け入れられるようになれると思っています。いいえ、そうならみせます」

「そうなの!?それだけの覚悟があれば、大丈夫かもしれないわね」
亜希子がコーヒーをカップに注いで持って来た。コーヒーに砂糖を入れてスプーンでかき回し、一口飲んでから祐子が言った。

「やっぱり、ルワンダのコーヒーが一番ね……亜希子さん、落ち着いて聞いてね。わたくしとあなたは、実の姉妹なのよ。あまり似てないけど二卵性双生児なのよ」

「えっ！お姉様、ご存じだったんですか？いつから、ご存じだったんですか？」

亜希子の唇がわなわなと震えた。

「昨日よ。あのひとが、あなたのことをとても心配していて、「よろしく頼む」って言っていたわ。でも、あなたには、わたしが知らないと思わせておいてほしいと言っていたの。初め、わたしもそうしようと思っていたわ。だけど、考え直したのよ。たった一人の大切な妹ですもの、生きている間に思い切りかわいがりたいって思ったの。わたしさえしっかりしていれば、大丈夫。もう、あなたは何の遠慮もいらなのよ。わたしの横にいらっしやいな」

亜希子は祐子の隣に移った。亜希子の目には涙が溢れていた。

「亜紀、辛かったですよ。よく耐えたわね。えらかったわ」

「由宇お姉様……」

祐子の頬を涙が伝わって流れた。亜希子は祐子の胸に顔を埋めて泣いた。ふたりはしばらくの間、抱き合っ泣いていた。やがて、亜希子は祐子の胸から顔を上げると言った。

「お姉様はいつもターコワイズの指輪をされていますが、ターコワイズがお好きなのですか？」

「ええ、これはわたしが生きている証なのよ」

亜希子は祐子の指の指輪が薬指から人差し指に移っていることを見落とさなかったが、その事には触れなかった。ポケットからアリゾナで買った揃いのターコワイズの指輪を二つ取り出した。亜希子は祐子の左手を取り、その薬指に片方の指輪をはめ、もう片方を自分の左手の薬指にはめた。サイズは測ったようにぴったりだった。

「由宇お姉さま、わたくしはお姉様がターコワイズをお好きなのだと思って、あのひとの生まれたアリゾナでお揃いの指輪を買いました。これはあのひとの分です」

そう言いながら、亜希子は祐子に大きめのターコワイズが付いた男性用の指輪を見せた。祐子は、左手を上にかざして、しげしげと指輪を見つめた。

「素敵ね。わたくしたちは3人でひとつなのね」

「はい、あの人の指にこれをはめていただくつもりです。わたくし、由宇お姉さまの指に指輪をはめる時をずっと夢見ていました。これでやっと、あのひとの指にもこれをはめられます」

「亜紀、ありがとう。ごめんね、わたし、あなたの心に気が付かなくて……」祐子は左手の人差し指にはめてあった賢から受け取った指輪を外し、棚の上に置いた。

「亜紀、今のご両親を恨んではいけないわよ。あなたの事をとっても愛しているのだから」

「由宇お姉様、わたくし、実の父と母の魂にコンタクトを取ったのです。昨日賢さんがお姉様にご説明されたでしょう。賢さんの親友の原さんが発明したオーラビジョンという、特定の人の過去を見る事のできるマシンをお借りしたのです」

祐子は驚いた。

「えっ！何ですって？わたしたちのお父さんやお母さんとお話をしたって言うの!?!」

「はい、わたくしは、偶然、今の両親が話しているのを聞いてしまったのです。わたくしの本当の両親が祐子お姉様の両親と同じだったのです。わたくしは生まれて直ぐに里子に出されたのだと知りました。とても衝撃を受けました。でも、わたくしが子供として今の両親の籍に入ったのは出生の一年後だったのです。その1年間のギャップを疑問に思い、今の母から、以前お姉様がわたくし達を失踪から呼び戻してくれた時に、今の母が鹿児島に持参した、実の両親の写っている写真をお借りして、それを媒体にして、一人でオーラビジョンを使って自分の実の両親にコ

ンタクトを取ったのです。両親の話していた内容と実の両親の話を総合してみると、恐ろしい事実が判明したのです。賢さんにも、おおよそのことはお話ししましたが、まだお話ししてない事もあるのです。辛くてお話しできなかったのです。でも、お姉様にだけは、本当の、本当の事をお話しします。まだ誰も知らないことなのです。実の父と母は、計画的に殺されたのです。それを仕組んだのが、お姉様を引き取って育てた叔父様なのです。わたくしの今の父も叔父様も、二人とも子供がありませんでした。そして、二人とも実の父の会社と取引のある会社の社長をしていました。実の父の会社は成功を収めていて、その後の成長も見込まれていました。ところが叔父の会社は経営状態が厳しく、経営破綻寸前の状態でした。実の父の会社はレアメタルやレアアースの精製方法の特許を取得していて、その成長が見込まれていました。後発になった、今の父の会社から提示した特許権の使用許諾の条件があまりに屈辱的だったので、実の父の会社は使用許諾を認めなかったのです。今の父はそれに業を焼いていました。そんな折、叔父が今の父の会社に養女の話を持ちかけたのです。今の父はまだ実の両親が健在なのに持ちかけられた話を嫌悪し、一言の元に撥ね付けました。しかし、レアメタルの製法を持たない会社の先行き不安が今の父を苦しめ、執拗に持ちかけられた誘惑の手に乗ってしまったのです。具体的な行為は叔父が手を汚したようです。自動車の転落事故が起きて、実の両親が亡くなり、葬儀が済むと、直ぐに叔父が二人を引き取る手続きをして、自分はお姉様を引き取り、もう一人・・・わたくしを今の父に引き渡したのです。実の父の会社は合法的に叔父の手に渡り、レアメタルの製法特許権は叔父が継承した実の父の会社から、今の父の会社に有償で譲渡されたようです。わたくしはその事を知った日から、もう2度と今の父には会わないと決めたのです。電話などで話しをしなければならぬときや、強制的に会わされたときは、できるだけ自分の意識を切り離して木偶と化すことにしました。今の母も、叔父の奥様も事実は知らないようです。今の母はとても優しくわたくしを育ててくださいました。この事実を知ったら、母はショックで倒れてしまうと思います」

祐子は冷静な面持ちで聞いていた。

「お母様には、絶対この話をしてはいけないわよ。誰にも話してはいけないわ。わたしとあなただけの秘密にしましょう。もう、そのことは忘れなさい。それが、この人生を生抜く道よ」

「お姉様はこのお話を聞いても、何とも思われないのですか？」

「亜紀、わたしは、全部知っているのよ。いいえ、全く知らないと言ったほうがいいのかもしいけれど。もう過ぎてしまったことは、水に流しなさい。心に澱を残してはだめよ。あなた、本当に辛かったでしょう。さあ、わたしの胸で、思い切り泣いて、すべて忘れてしまいなさい」
亜希子は祐子の胸に頭を埋めた。祐子の胸は温かかった。もう、悲しみの涙は流れなかった。今、姉に、そして母に抱かれている自分を感じて、あまりの感動に打ち震えた。亜希子の涙で祐子の胸が濡れた。

「由宇お姉様、ママ、お母様、大好きです。愛しています」

コネラン

賢と梓がシドニー国際空港に着いたのはキガリを発った2日後の早朝だった。ナイロビでフライトをケニヤ航空からエミレート航空に乗り換えなければならなかった。飛行機は真夜中に発ち、ドバイを経由して、翌朝シドニー・キングスフォード・スミス空港に着いた。機内で、梓は黙々と報告書のまとめを行っていた。賢もスウェーデンの取り組みのまとめと、香川が提案するであろうレアアースやレアメタルの入手経路発掘の支援方法を頭の中で展開させていた。ビジネスクラスだったので、ふたりともゆっくり休むことができた。入国手続きを済ませ、そこから国内線に乗り換えてエアーズロック・コネラン空港に着くと、出口に日本人の畑村が「内観様」と記載したA4ほどの大きさのカードを持って立っていた。

「お疲れ様でした。畑村です。オーストラリアは初めてですか？」

「はい」

賢と梓も挨拶をした。

「アボリジニの生き方をお調べになりたいと伺っていますが、それでよ

ろしいでしょうか？」

「はい、特に精神的な部分について、勉強させていただきたいと思います」

「エアーズロックはご覧になりますか？地球の臍ですから、初めにこれを観ておいた方が、彼らの10万年前からの生き方を理解しやすいかと思いますが、どうされますか？」

「ええ、是非、観てみたいと思います」

「近いんですよ。30分程度で着きます。食事はされましたか？お金とか、他の準備はよろしいですか？今日は、見学だけということにさせていただいても、よろしいですか？明日、アボリジニの家を訪問しようと思います。アポイントメントも明日の午前10時に取ってありますが、それでよろしいですか？」

賢と梓は、すべて畑村に任せると言った。

エアーズロックはずんぐりしていた。岩の周りを取り囲んでいる道から眺めるこの岩は、セドナで観たレッドロックと似た雰囲気を感じさせた。賢と梓は、そこから放射されている身体に響くような強い力の存在に気が付いた。畑村が言った。

「この岩は、アボリジニの人たちの聖域で、彼らの中でも、選ばれた人しか昇ることが許されていない岩なんです。現在はアボリジニが政府の要望を受け入れて、この岩を貸し出す形になっていますから、観光客も登頂できますが、あくまでアボリジニの人たちの心のよりどころなので、それを念頭に入れておいていただきたいと思います。登ってみますか？」

賢と梓は、首を横に振った。ふたりは、身体にかすかな振動を感じていた。

「アボリジニの人たちは、本当は観光客には登ってほしくないんです。彼らは、世界中に天から与えられた聖地があり、ウルルもそのうちのひとつだと言っています。世界を創造した精霊たちから与えられ、清められ、精力を与えられたエネルギースポットで、すべての生物にエネルギーを与えてくれる場所なので、その場所を荒らすと、その反動としてどこかに自然災害や流血が起きると言っています。ウルルは朝と夕方が美しい

んですよ。それでは、エアーズロックの近くまで行って戻って来た後で、オルガ岩群に廻りますが、そこからホテルに戻る途中で、もう一度こちらに寄ります。夕日を受けたエアーズロックのすばらしさも体験してください」

畑村は観光ガイドのような話し方をした。賢と梓は、観光客になったつもりで畑村の話聞くことにした。駐車場に車を止めると、ふたりはバスから降りて来た大勢の観光客の中を、畑村の後に附いて歩いた。畑村は道の両サイドに張られたロープに沿って、エアーズロックの登山口に向かった。岩は将に大きな一枚岩を思わせるものだった。ふたりはこれほど巨大な岩は見たことがなかった。登山を控えさせる意図で立てたと思われる注意書の立て札があったが、観光客の多くは「ここまで来たのだから、是非登りたい」と、鎖の張られた山道を登って行った。賢と梓は畑村の後に附いて、マラ・ウォークというトレッキング・コースを歩いた。背丈の低い木々が道の脇に生えている。岩の裂け目のような場所や岩肌に無数に穴が空いている場所などを通り抜けた。賢と梓は、時々身体が浮くような感覚を覚えた。意識を解放すると、そのまま上空に飛んでゆきそうである。賢は自分の意識を大地に固定した。グランドキャニオンの周辺と同じように、ここは嘗て海の底だったに違いない、窪みにある貝殻が目についた。梓もさすがに疲れが出ているようで、肩を落として、足を引き摺るようにして歩いている。賢は、梓の疲労が心配だった。梓は、賢が振り向くたびに、軽く頷いて大丈夫という仕草をした。壁面に大きな窪みが出来ている場所に着くと、畑村が暫く休憩しようと言った。そこは柵で囲まれていて、大勢の観光客で溢れていた。少し休んでから、窪んだ壁面に描かれている落書きの様な岩絵を眺めた。「文字文化を持たないアボリジニのアンナグ族が、ここに居住していた時代があったのですが、この壁を使って、意志を伝えようとした名残があるのです。描かれている絵や、記号でアボリジニの伝説を顕しているようなのです」

と畑村が説明した。

「このウルルの上で、一人のフランス人の女性が裸になって踊り出した

ことがあって、アボリジニが「登山を全面禁止にする」と政府に申し入れたことがあるんですよ。アボリジニの人たちはこの神聖なウルルで神聖さを汚す様な行為をされるのを、忌み嫌っているのです。それに、この上で人が怪我をしたり、死んだりするのは、絶対に許せないのです。ですから、先ほどの注意書きも、観光客には神経質すぎるように感じるかもしれませんが、気軽にウルルに登って欲しくないのです」意識が高揚してくるのを感じる。

賢は祐子に意識を送ってみた。祐子が朝食を食べている姿が、脳裏に浮かんだ。祐子の前には2人の女性がいる。祐子は直ぐに食事を終え、二人の女性を残して自分の部屋に戻って行った。賢は、忙しそうだった。しかし、祐子の躍動を感じて安心した。亜希子にも意識を向けてみた。亜希子はキッチンに立っている。誰かがドアをノックしたのか、ドアを開けて立ち話しをしている。それが鹿島であることが分かった。寝室に入って小バッグを持って来ると、外に出て扉に鍵を掛けた。これから食事に出掛けるのだらうと賢は思った。亜希子の元気そうな姿を感じてほっとした。

「賢さん、どうしたのですか？」

「あっ、いや、少し祐子と、亜希子の様子を伺ってみたんだ」

「ボールが無くても遠隔透視ができるのですか？」

「あっ、そうだな、できるみたいだ。ここはエネルギーレベルが高いから、ボールが無くてもできるのかも知れない」

「賢さん、わたしも先ほどから、額の裏にスクリーンがあるようで、そこに何か映っているような感じがするんです。何か大勢の人が動いているような、なんだか訳が分からないんですが・・・」

「うん、透視かな、それとも予見かな？」

目をこすっている様を見て、畑村が言った。

「どうかしましたか？気分でも悪いのですか？」

「いいえ、大丈夫です。何かが見えたような気がしたので」

梓は誤魔化した。

「それは、きっと光の関係ですよ。ここでは、自然の作り出すいろいろ

な光の芸術が観られます。観光客は皆上まで登りたがりますが、特にウルルは頂上より、下から見た姿の方がすばらしいですよ」

畑村は景色の事を言った。梓は頷いた。1 km ほど歩いていただろうか、カンジュ・ゴージという場所に着いた。絶壁に黒い滝の跡がある。滝壺は枯れていて、そこだけ見れば地の窪みにしか見えない。

「雨が降ると瀑布が現れ、とても美しいんです」

と畑村が言った。

「ウルルの外周は9キロあるので、徒歩だと2時間以上かかって、夕方になってしまいます。夕方になる前にカタジュタにご案内したいので、このあたりで引き返したいと思います」

3人は観光客の列に紛れて、元来た道に戻った。ふたりが車に乗ったのを待って、畑村はオルガ岩群に向けて車を発進させた。丸いコッペパンをころがした様な岩がいくつも並んでいる。珍しい光景だった。畑村がこのカタジュタという名前はアボリジニの言葉で「沢山の頭」という意味で、岩は全部で36個あると言った。同じ砂岩でも、セドナのレッドロックの樣にごつごつした感じの岩ではない。

「岩と岩との間の道は、風の谷と謂われるトレッキングができる道になっていて、吹き抜ける風が気持ちいいですよ。周囲の砂漠とこの岩、そして谷を吹く風は、自分の存在を感じさせる仕掛けのように思いませんか？僕にはまるでアボリジニの古代の神話ドリームタイムに誘われるように感じます。僕はここに惹かれてオーストラリアに住み着いてしまいました」

畑村は、この場所がお気に入りのようだった。梓はアメリカン・インディアンの友人バーニー・スリプソナーが歌ってくれた歌の歌詞を思い出していた。賢はアボリジニの人たちも、アメリカン・インディアンと同じように生きて来たのだと思った。そして、彼らは白人達によって強制的に生活基盤が破壊され、命も奪われ、生き残ったもの達も自然を無視した生き方を強要されたのだと思った。暫く散策してから車に戻ると、畑村が夕日を受けたウルルを望むビューポイントにふたりを連れて行った。もう、大勢の観光客で一杯だった。日本人も沢山いた。中にはテ

ーブルにワインやシャンパンを用意して、楽しんでいる観光客もいる。ここには、アルコールの持ち込みができるようだ。畑村が端の方の空いている場所を確保して、ふたりを呼んだ。そこで30分ほど陽が傾くのを待った。それは見事な景観だった。時間の流れに同調するかのようになり、周囲の色が変化していった。褐色だった岩肌が周辺の草木や人影と共にオレンジ色に染まってゆき、やがて炉に入れられた丸い焼き物でもあつたかのように真っ赤になった。周りからため息が聞こえてくる。やがて岩肌は次第に紫色に変わっていつて、薄暗い夕暮れの中に立つ暗い影に変化していつた。賢は右手で、梓の左手を握つた。梓もしっかり握り反した。賢は瞑目し、地に固定していた自分の意識を解放し、意識の方向を空に向けた。ふたりの身体が浮き上がった。賢は梓の手を取つて空高く舞い上がった。ウルルが下に見える。先ほど沈んだ太陽の輝きが再び見えてきた。

「賢さん、美しいですね。ウルルの陰が長く尾を引いています。ずいぶん高く揚がつたのですね」

「夕方のウルルは本当に美しいね。アボリジニの人たちが描く点描画が理解できるような気がする。太陽の光がすべてを貫いていたな」

ふたりは少し空中に留まって、薄闇に覆われてゆく砂漠に、ぽつりと浮かんだウルルを眺めていたが、太陽が水平線に姿を消してしまうと、高度を下げて元の位置に降りて来た。ビューポイントは既に暗くなつていたが、再び大勢の人たちが集まっていた。ふたりが着地すると畑村が駆け寄つてきて言つた。

「ど、どうなつているんですか？」

「空を飛んで、美しいウルルをもう一度上から見てみました」

畑村は右手で自分の右頬を2度ほど平手打ちした。

「うっそでしょ。内観さんは、手品師ですか？」

「いいえ、できるんですよ。こんな事は、誰でも練習すればできるようになるんですよ。人間には元々重力を制御できる能力があるんですよ。自分の重力も、他のものの重力もね」

「あの一、内観さん、僕にもやり方を教えてくれませんか？」

「すぐには、無理だと思います。自分の核に立ち戻って、投影のフィルターを一部外せばいいんです。でも、このことは人によっては思い出するのに100万年もかかる人もいますからね」

「えっ？何をおっしゃっているのか分かりません……まあ、とにかくホテルに参りましょう。食事をご一緒させていただけますか？そのときにお話を伺わせていただければ嬉しいのですが……」

「いいですよ。話すのは簡単です。でも、理解して実行するのはかなり難しいですよ。生まれる前にどこまで自分を認識できていたかということも関係しますからね」

3人を取り囲んでいた人垣の中から、数人の男性が近づいて来た。賢は畑村を促して、直ぐに車に向かった。

チェックインを済ますとふたりは荷物を部屋に運び、そのまま戻ってきて、待っていた畑村と共にホテルのレストランに向かった。ブッフエ・スタイルのレストランだった。3人はボイルドサラダの横にローストビーフを切って載せて貰った。フランスパンを添えて席に戻ると、梓が言った。

「久しぶりにおいしいそうな料理ですね」

「梓は、ローストビーフが好きなのか？」

「はい、大好きです」

畑村が言った。

「内観さん、さっきの空中浮揚、もっと詳しく教えてくださいませんか？」

「畑村さんは、人間がこの肉体だけでなく、他の要素からも出来ていることを知っていますか？」

「はい、肉体と、霊とで出来ていると聞いています」

「それを実感したことがありますか？」

「いいえ、でも、僕は考えることができますから、存在しているのだと思っています。思考って、霊の作用じゃないんですか？」

「じゃ、こうしましょう。先ず、今まで、貴方が思っていた自分という存在についての認識を捨ててください。そしたら、その概要をお話しします」

「はい、捨てました。ではお願いします」

「すべての人は一つの核で繋がっています。その核を映し出したのがこの世界です。この世界に写されている自分も、他の人もすべて、意識で創られている空間に描かれたエネルギーの振動で、存在として確定されたように顕現しています。自分から見た世界だけが自分にとって存在しています。そして、すべての人は自分です。ですから、他の人から見た世界も自分が見ているのです。そして、人ばかりではなくて、すべての存在物も同じなのです。人間とその他の存在との違いは、その他の存在は、人間のように自分自身を認識できないということだけなのです。自分を認識するということは自分自身を確定することです。確定するということは、この地球上では同時に重力を持つことを意味します。だから投影する位置を確定的なものではなく、確率的に変動させれば、現在の位置を移動できます。それはすなわち、この空間に存在しなくなることで、別空間に自分を移すことなのです。その別空間をこの空間と少しずらして重畳させれば、別空間に移っている間はこの空間には存在していないので、この空間における重力は無く、その別空間にある自分がこの空間に映し出されているだけ、ということになります。だから、自分を取り巻く場全体を自分の意識で充たし、自分で自分の位置を決めているようなものです。重力は関係なくなります。あとは、自分自身を認識できるようになること、これさえできれば、本来の自分の核に立ち返ることができて、自分の意識で何でもできることになります。わかりますか？」

「全然、わかりません。僕には無理のようですね。まず、最初の自分の核ということが理解できませんから」

「理解する必要はありません。知ればいいんです。知るためには、僕の姓のように、内側に入るしかありません。瞑想でね」

「もう、だめです。聞いただけでは、どうにもなりません。僕を貴方の弟子にしてくださいませんか？」

「それはできません。僕にはやらなければならないことがあるので、弟子をとることはできません」

「それじゃ、いまのことを教えてもらえる講座や教室のようなものは開かれてないでしょうか？」

「今のところ、ありません。でも、将来は出来るかもしれません。畑村さん、貴方は人の命が永遠だということを知っていますか？」

「はい、そう聞いています」

「先ず、それを、実感してください。そして、自分の核を見つけてください。そうすると、必要なことが自然に現れてきます」

畑村はもう、これ以上は無理だと思った。空中浮揚のことを口にしなくなった。梓は話を聞いていたが、ようやく賢の言わんとすることが、意味として頭に入るようになってきたのを感じていた。畑村は、翌日、アボリジニの家を訪問することについて説明し始めた。賢と梓は説明内容を頭に書き込んだ。

その晩、梓は夢を見た。大勢の人たちが集まっている夢だった。その人達の大半は馬に跨り、銃を手にしていた。一人のタキシードを着た紳士が掲げていた旗を振り降ろした。馬に乗った人たちが一斉に四方八方に散って行った。やがて銃声が響き渡った。梓はその銃声の轟く場面を観ていた。二人の裸の男性が走っている。また銃声が轟いた。二人は岩陰に身を隠して震えている。大きな笑い声がした。馬に乗った男が銃を構えている。銃声が轟き一人の裸の男の足から血がほとぼしり出た。もう一人の裸の男は必死になってその岩陰から逃げ出した。別の馬に乗った男がその裸の男の正面から迫ってきた。裸の男は頭を抱えてその場に蹲った。正面から来た男が銃を構えた。銃声と共に、裸の男の身体が横に転がった。もう一度銃声が出て、先ほど足を打ち抜かれた男がその場に仰向けに倒れる姿が見えた。馬に乗った二人の男は銃を上に掲げて、空に向けて撃った。そしてけらけらと高らかに笑った。梓はあまりの残酷さに、身の毛がよだち、飛び起きた。パジャマが汗でびっしょり濡れていた。時計は3時を回っていた。梓はシャワーを浴びると、下着だけ身につけて、毛布を裏返し、そのままベッドに潜り込んだ。

翌朝、梓は食事をしながら、賢に夢の話をした。賢は「そのことは忘れた方がいい」と言った。朝食を済ますとふたりはチェックアウトを済

ませた。畑村がやって来ると、車に二人のスーツケースを載せて、直ぐにアボリジニの家に向かった。

そこは車で4時間かかる溪谷の岸壁に造られた住居であった。畑村はその住居は外国人はおろか、オーストラリアの国民も入ることを拒否される原住民の保護区の中にあり、カバルカフル・エルラミという名の長老が独りで住んでいると説明した。車道も十分完備されていない道を進み、岩のごつごつした場所まで来て、車を停めた。畑村に促されて、賢は小鞆を持ち、梓はハンドバッグを手にして車から降りた。畑村がそこからは徒歩だと言った。スピنفェックスと呼ばれるとげとげしい背の低い植物の茂る岩だらけの道を20分ほど歩くと、大きな岩の突き出た場所に行き当たった。その岩の先は崖になっていて、岩の裏側から崖に沿って、壁面に彫り込まれたように細い道が続いている。それほど急勾配な崖ではないので、落下の危険性は感じないが、それでもあまり緑も無く、あちこちに岩が突き出ている光景は、梓に「一人だったらとても歩けそうにない」という不安を覚えさせた。崖に沿った道は途中で3度折り返し、30分ほど下って平坦な場所に出た。そこは谷底ではなかったが、木々も生えていて、ふたりをほっとさせた。その木々の間を進むとエルラミ長老の家があった。家とは謂っても、ただ岸壁に坑（あな）を掘り抜いただけの住居である。畑村がヒューヒューという変な鳴き声を発した。少しすると一人の白髪で長い髭を蓄えた老人が姿を現した。赤黒い顔で額と頬に深いしわが寄っている。目が鋭く、賢と梓にまるで鷹のような印象を与えた。老人はイギリス系の英語で、畑村に附いて来るように言った。賢と梓は家の中に入れてもらえんと思っていたので、少し拍子抜けしたが、老人の直ぐ後ろを歩いている畑村に、遅れないように附いて行った。一本の大きなゆうかりの木の下に竹で編んだような敷物が敷いてある。老人は3人にその敷物の上に座るように促してから、自分は岩の上に腰を掛けた。畑村が言った。

「****」（長老、今日はありがとうございます。これは長老からいただいた招待状です。ありがとうございました）

そう言うと、畑村は小バッグから1枚の紙切れを取り出し、長老に見せ

た。長老はその紙切れを、受け取ると低い声でゆっくり話し始めた。

「*****」(遠いところを、よくおいでなされた。疲れたでしょう。わたしは先ほどの洞窟で、寝起きしているカバルカフル・エルラミです) 老人の声は、顔から来るいかめしい印象とは正反対に、穏やかで、静かで心地よかった。優しく懐かしい声がふたりの心の奥に響いてくる。賢がそれに応えた。

「*****」(わたくしたちのご要望をお聞きくださいませ、本当にありがとうございます。わたくしは日本から来た内観賢、こちらは田辺梓です。よろしく願いいたします。昨日はウルルとカタジュタを拝見させていただきました。ありがとうございました)

「*****」(あそこはわたくしたちの聖域なので、わたくしたちもあまり近づかないのですよ。観光客の人たちが中に入ってきていますが、それはわたくしたちには、あまり心地よいものではありません。でも生きてゆくためには、受け入れざるを得ないこともあります。あなた方がここに来ることは、1年前からドリームで知らされていました) 畑村が言った。

「*****」(長老、このふたりは日本人の意識を変革するためのプロジェクトに取り組んでいる人たちです。今日は、アボリジニの皆さんの生き様からプロジェクトに参考にできることを学んで帰りたいと申しています。よろしく願いいたします)

「*****」(どのようなこととお話ししたらいいでしょう) 長老は賢と梓に向かって言った。賢が応えた。

「*****」(アボリジニの人たちは何万年という長い年月の間、自然と一体となって生きてきたと聞きます。それも何百にも上る種族からなる人々が大きな戦いもせずに暮らしてきたことも、不思議でなりません。どのようにして生きてこられたのか、是非お話しいただきたいのです。そして、白人によって犯され、追いやられた今、どのような意識を持って生きておられるのか、是非お聞かせ願いたいのです)

賢が梓の方を向いて頷き、何か言うように促した。梓が言った。

「*****」(わたくしは、女性です。アボリジニの人たちが弱いも

のを大切にする、あるいは女性、特に妊婦を大切にしていたと伺いました。その根底にある考えかたをお教えいただきたく思います。それと、太陽をすべての源とお考えのようですが、そのことについてもぜひお教えください)

エルラミ長老は傍らに置いてあった直径30センチほどのバスケットを3人の前に置いて、中に入っているプラムを食べるように促してから話しを始めた。

「****」(これはこの辺りで取れるビリーゴートプラムという果物です。この大陸はその風土からでしょうが、食物が非常に少なく、また極度の乾燥地帯で、気候の変動も一年周期とは限らず不規則ですし、棲むには過酷な大陸なのです。そういう地理的制約を我々は長い年月の間、いろいろな動物、植物、果物、ゆうかりの葉などの葉草を食して、命を繋いで生きてきました。どうぞ召し上がりながら聞いてください。わたしは、あまりこういう話をするのは好きじゃないのですが、現在の我々種族の状態を理解していただくために、先ず、我々アボリジニが受けた苦しい試練についてお話します。我々が共に生きてきた大自然の生物は、1788年から始まったイギリス人の進入で、すっかり荒らされてしまいました。彼らの持ち込んだ牛や、馬、豚、にわとりなどの家畜がこの地の貴重な植物を食料にしたためです。そのため我が民族は食糧難に陥ってしまいました。それまでの我々は、自然の中で、植物を採取し、必要最小限の動物を捕らえて、食料や、その他生きるために必要な道具などの材料に使ってきましたが、それが難しくなったのです。更に悪いことに、イギリス人は犯罪者の流刑地として、この地に大量の囚人を送り込んだのです。その囚人達は、精神的に愛の意識の低い人達であったため、我々民族を自分達より劣る民族と定義して、暴行、虐殺などを繰り返したのです。我々は自分たちの欲望のために人間と戦う様な生き方をしてきていませんから、ただ逃げるか、殺されるか、あるいは陵辱されるしかなかったのです。それでまた沢山の仲間の命が失われました。更に、彼らは自然に対峙する生き方をする人たちだったので、自然界から生まれるはずのない病気の病原菌をこの国に持ち込みました。

我々は長い年月の間、自然と融合して生きて来ましたので、体内にそれらの病原菌に対する抗体を持ち合わせていなかったのです。そのために壊滅的な被害を受けました。わたしは子供のころに祖父から聞いたのですが、それはひどかったようですよ。かれらの行為の内、最もひどかったのは、我々を人間として見なさずに、原始人とか獣として扱ったということです。政府が我々を殺害することを法律で認めたのです。それから、大量虐殺が公然と行われるようになりました。スポーツ・ハンティングとかいうゲームで、我々の命を牛や、馬以下に扱ったり、アボリジニ殲滅作戦部隊が編成されたりしました。特に海に面した地域では、それがひどかったと聞いています。シドニーやバースなどでは我が民族は壊滅状態になりました。皆殺しにあったのです。今でいうジェノサイドですね。自分達のことを文明人と称する白人達によって、この国でも、公然と野蛮な殺戮が行われたのです。1920年によく政府は我々に対して保護政策という名の政策を始めました。保護区域と称して、我々を奥地の砂漠地帯に移住させたのです。これで、我々種族を自分たち白人から遠ざけ、隔離したのです。白人達は、徹底的に人種差別をおこなったのです。白豪主義と称して移民の制限や我々種族への弾圧政策を続けました。1869年から1900年間、アボリジニの子供や混血児を親元から引き離し、白人の保護の元に養育する。建前上は「自分たちの様に優越した人種が立派に育てるべきだ」という考え方に基づくものだったようですが、その政策はあくまで建前だけで、実際には混血児をハーフ・カーストと呼んで売春婦として利用したり、子供を引き離すのも、本当はアボリジニの文化を根絶やしにして、アボリジニの存在自体を消滅させるのが目的だったのです。教会まで介入して子供のおよそ1割を連れ去り、保護、養育どころか強制収容所や孤児院などの隔離施設に連れて行ったのです。協会の人たちは、キリストの教えに従い、博愛の精神に則って、そのような行動をしたように思っていますが、その博愛の精神は司教などの聖職者が作り上げた規範で、純粋な愛情ではありません。こうあるべきだという、教義なのです。愛という言葉を借りた、強制執行なのです。彼らのやった行為は、まるで、貧しく、栄養失調に

なり、食べ物が喉を通らない子供の口にパンを押し込んでいる継母の姿です。心で愛しているのではなくて、愛するように書かれているマニュアルに従って行動しているから、自分では保護したつもりでいても、その次にすべき行動が分からないのです。だから子供達を連れ去っておきながら、そこで保護を放棄してしまったのです。子供達は虐待を受け、殺された者も大勢いました。その結果、我々種族は、再起が危ぶまれる状態に陥りました。自分たちが行った迫害に対して、白人達は、我々のことを"Stolen Generation" (盗まれた世代)、とか"Stolen Children" (盗まれた子供達) なんて呼んでいるのです。ばからしくて、言葉も出ません。勿論我々だって、抵抗しました。デモや、時としては暴動を起こしたりしましたが、それは逆効果で、彼らの逆上を煽り、迫害は一層徹底していったのです。大勢のものが逮捕され、正式な裁判も受けることなく、死刑に処せられました。彼らは我々の700あまりの種族の人口が、もともと30万人程度だったと言っていますが、そんな数じゃありませんよ。長老達の話聞く限り、数百万人は居たようです。それが、1パーセント以下にまで殲滅されたのです。この前のオリンピックをご覧になりましたか、あんな風にアボリジニを前面に押し出し、雷の精霊ナマルゴンなどを創作主として表現して、あたかもアボリジニの精霊を大切にしているかのように見せ、自分たち白人を金属の板などを使って文明人として否定的に表現したつもりでしょうが、あれは現在の自分たちの立場を守るための茶番劇に過ぎません。あらゆる手段を用いた極端なジェノサイドが行われたのです。我々はよく生き延びてきたと思うと、あまりのばからしさに、時々笑いが込み上げてきます。まだ、純粋な意識で生きているアボリジニ達が集まると、大笑いすることがあります。不毛な乾燥地域である内陸部に棲んでいたたり、追いやられたりした我々の種族は厳しい環境の中ではあっても、なんとか命を繋ぐことを許され、自然と調和して我々独自の生き方を守ってきました。我々種族がひどい仕打ちを受けても、生きてこられたのは、ドリームタイムを生きているからです。殲滅政策で、消滅した種族も沢山あります。例えば、3万7千人ほど居た純血のタスマニアン・アボリジニなどは絶滅してしまいま

した。我々は文字を持ちません。だから白人や他の人種の人たちから見ると野蛮人に見え、自分たちがアボリジニの文化の記録をしなくてはならないとっていて、絶滅によって文化的な痕跡が消滅したなどと馬鹿なことを考えています。しかし、我々にとっては、そんなことはどうでもいいことなのです。命はこの世だけじゃないですからね。この世では精霊からのメッセージを受け取り、それに基づいて現在を生きることがすべてなのです)

ここで長老は一呼吸置いた。賢は白人達がアメリカやカナダばかりでなく、オーストラリアの先住民をも虐殺した事実、人間の計り知れない愚かさを見た。愛を標榜しているキリスト教徒の人たちが、それがたとえ教義によるものだったとしても、どうして、同じ時代に生きている人たちを、無慈悲に殺害することができたのだろうか疑問に思った。長老は再び話し始めた。

「****」(我々種族の受けた屈辱的な過去について話しすぎましたね。ちょっと横道に逸れてしまいました。それでは本題に戻しましょう。アボリジニのこの地上での生き方についてお話しします。先ほども言いましたが、アボリジニと謂っても、非常に多くの種族があって、その生きざまも一様じゃないのです。わたしもアボリジニの民族会議で、多くの異なった種族の人たちと話しをしています。考え方も一様ではありません。しかし、その根底は、自然と融合して生きるという点で一致しています。各種族は精霊と共に生き、独自にその精霊の宿るトーテムを持っています。それは植物であったり、動物であったり、時としては岩であったりします。そのトーテムはその種族にとっては、精霊の恵みであり、自分たちがいただくものではなく、他の種族の為に保護し、保存して、他の種族に与えるものなのです。別の種族はそのトーテム植物やトーテム動物をその種族が守り、育てていてくれるものと期待しています。そして、そのトーテムの種族の許しを得ないと、採ることができないというルールがあります。それぞれの種族が別々のトーテムを持つことで、自分たちの守るべきテリトリーが決められ、お互いに助け合う世界が生まれ、自然の中の調和が保たれます。アボリジニ民族会議で

は、お互いのトーテムを示し合い、そのトーテムの話などが行われます。もう一つ、我々アボリジニには婚姻の規範としてマルクを持っています。英語ではスキンネーム、民俗学者はサブセクションと呼んでいますが、このマルクという種族の特徴を示す大切なおきてがあります。男・女それぞれが8つのマルクに分類されていて、それが親族の中で一定のサイクルで入れ替わってゆきます。男は自分のマルクをもらおうと自動的に結婚相手のマルクが決まってしまうのです。マルクは、自分が責任を持って面倒を見なければならない相手や、扶養してくれる人という種族の中の間人間関係を示したものです。互いに助け合って生きてゆくために、先祖が精霊から教えて貰ったしくみです。種族内の制度としてのマルクは種族の結束を固めるために作られた制度です。種族間の関係や、種族内の統合を考えると、700もある種族を調和させてゆくには、このような制度が必要で、個より全体を考えたあり方なのです。自分の個としての存在は生活という場面では捨て去るのが最も理想だと考えられています。だから、わたしは種族をまとめる最大の課題の一つである婚姻を通じて、全部の種族の結びつきを強め、種族全体を統合するために、先祖が精霊の意志に基づいて作ったものだと考えています。婚姻を行う場合に、妻だけでなく、世代にまたがった部族全体との関係まで作り上げる制度がマルクなのです。世代ごとの役割分担、相互扶助を考えたルールなのです。自分の親族を16分類に分けていて、それぞれの親族に別々のマルクがあるので、種族の中には自分の親族以外に自分と同じマルクを持つ者も居て、その者とは兄弟、姉妹という関係ができあがり、また、父や母と同じマルクを持つ人に対しては、父や母に対する様に敬うという意識が生まれます。妻としてのマルクを持つ相手と結婚することになりますが、その妻と同じマルクを持つ女性にはすべて妻と同じような意識で接します。このようなシステムで、我々の種族には種族内に網の目のような関係ができあがりますし、常に誰かを敬い、誰かに敬われるという相思相愛の関係が構築されます。我々アボリジニを理解していただくにはこのトーテムとマルクを理解していただくのが、最も近道です)

こう言うと、長老は3人にプラムを食べるように促した。賢と梓はプラムを手にとると、嚙ってみた。甘酸っぱい味が口の中に広がった。その味は非常に心地よいものだった。梓はセドナで食べたネクタリンを思い出した。嚙ったプラムを飲み込んでから言った。

「****」(長老、おいしいです。元気が出ます。ありがとうございます。いくつか質問してもいいですか?)

「****」(いいですとも、お嬢さん)

「****」(マルクについてなのですが、マルクは一生同じ名前なのかということと、家族や親戚の人たちとは違うマルクになるのかということと、父と同じマルクが自分より若い人に附くことはないのかということと、もしあるのなら、そういう人に対して父親に対するのと同じ感情を抱くことはできないのではないということ、それから、種族の中に妻や夫と同じマルクを持つ人がいたとき、そのひと達に対しては、配偶者に対するのと同じようなことをしてもいいのかということなのですが……)

「****」(我々は生まれたときからマルクに慣れているから、何の不思議もないけど、あなた方がこのしくみを理解しようとする、なかなか難しいかもしれませんね。もう少し詳しく説明しましょう。まず、初めの質問ですが、マルクは一生同じ名前です。生まれたときに決まっています。そのマルクを貰うと、もう、自分がこのアボリジニの社会の1員になったことを意味します。両親のマルクが既に決まっているわけですから、そのマルクと同じマルクの人たちに対しては父や母に対するのと、同じような尊敬と、服従の意識を持って接する必要があります。それはたとえ相手が自分より若くても同じです。それはどういうことかと言うと、相手を父や母のように敬うことで、敬虔な心が沸き上がるでしょう。自然の中では、人はどんなものに対しても敬虔な心が絶対必要なのです。喩えそれが自分より劣ったものでもです。それを教えているのです。貴女は女性ですから、同時に誰か知らない人が自分のことを母と思うこともあるわけです。そして、全然関係ない男性から、自分の妻のように、思われることもあるわけです。でもこれは、その男性が貴方

のことを妻として、扱っていいかという、そうではありません。やはり、貴女は貴女の夫というマルクを持つ男性の中のたった一人の男性の妻になるべき定めであり、その夫となった男性に尽くすのです。でも夫に尽くすのと同じように、夫と同じマルクの男性にもそういう気持ちを持って接する必要があるのです。よく誤解されますが、フリーセックスなんかじゃないのです。あくまで、姿勢と意識の持ち方なのです。そして、愛情です。たとえば一人の女性が病気になったとします。もちろん夫や子供、両親、そして親戚のものたちは心配して、いろいろ手を尽くしてくれます。しかし、それだけではないのです。周りにいる人たちがみな、その女性と何らかの関係を持っているのです。みな、その女性のことを心から心配します。家の中に入れなければ、家の外で、一日中その女性のことを見守ります。そして、病気の回復を祈るのです。分かりますか？)

「****」(ありがとうございます。すべての人々が愛の絆で結ばれているのですね。大体理解できました)

賢が言った。

「****」(長老、このしくみはすばらしい仕組みですね。これは命が精霊によって与えられるということを前提にした仕組みですね。そして、死ぬと、また元の世界に戻ってゆくという考えですね。このようにお互い、尊敬し合い、助け合って生きてゆく仕組みの元では、必ず平和な社会が生まれると思います。だから、アボリジニの人たちはあまり自然の動植物に恵まれていない土地でも、お互いに争うこともなく、何万年もの間、生きて来られたのですね)

「****」(内観さんでしたね。我々もそう信じています。精霊の声に耳を傾け、言葉を大切に、それを実行して生きてきました。沢山の言葉があります。それは精霊から生まれた言葉です。我々は精霊に導かれ、自然と共に生きる生き方が正しい生き方だと信じています)

賢は更に質問した。

「****」(長老、このような精霊に導かれた平和な世界に、どうしてイギリス人の様な殺戮を平気で行う、異質な人種が舞い込んで来た

とお考えですか?)

「****」(そこです。それが今ひとつ分からないところなのです。我々にはドリームタイムという神話があります。そのドリームタイムは古代の神話ではないのです。現在も生きている神話なのです。その中に答えがあるのだと思います)

「****」(僕はドリームタイムのことは知りませんが、人類は、そろそろこういうマルクのような仕組みが無くても平和に生きられる様な精神段階に進むべき時期に来ているように思っていますが、長老はどうお考えになりますか?あなた方アボリジニの人たちも、アメリカン・インディアンの方々もみな大自然と一体となり、大自然を敬い、精霊の言葉を聞き、精神性に重きを置いて、清浄な生き方を守って生きてきました。そのような、最も純粹で平和な人たちが、物質文明に浸り、お金や名誉、安楽な生活を求め、有頂天になって新天地を求めると言って、意気込んでやって来た別世界の人たちから、否定され、侮辱され、攻撃され、虐殺までされて、平和を打ち砕かれたのです。そして、今、そのことを振り返るときにきています。これは何を意味すると思われませんか?)

「****」(内観さん、貴方には何か、お考えがおありのようですね。一つ、わたしに説明していただけないでしょうか?)

「****」(はい、本当は先ず、ドリームタイムのお話をお伺いしたいと思うのですが、でも、お望みですので、僕の考えを少し、説明してみます。僕はこの世界は自分の核部分を映し出した写像だと思っています。すべての人間の核は一つに繋がっていて。その核を歪み無く映し出すと、理想郷ができあがるのだと思います。この世界のあらゆるものが一つの核から映し出されたものだと考えています。この世界は実と虚の二つの場からなっていて、我々がいつも生きている場が実の場、靈的な要素が作用している場が虚の場だと考えています。実と虚は表裏一体で、どちらが欠けてもこの世界は成り立たないと思います。人間の生命は永遠で、死を迎えると実の場から虚の場に実態が移るのだと思います。すべてのものは自分の意識によって存在していると捉えています。そして、その

実と虚に分かれて存在していたこの世界が、次のステージに向かっていくのだと思います。それは特に神聖なものが消滅してゆくプロセスから展開してきているように思えます。あなた方、アボリジニの皆さんが経験したように)

長老は両手を組んで頷きながら、聞いていたが、賢の言葉が終わるのを待っていたように言った。

「****」(貴方が“写像”と表現した世界は、我々が生きているこの世界、ドリームタイムそのものです。わたしたちもこの世界は精霊の指示を受けて、自分たちの意志で生きている場、すなわちドリームの具現の場なのだと考えています。ドリームタイムが伝えている話は、天地創造から現代に至るまでの道です。わたしたちには現在しかありませんから、それは神話として残っているに過ぎないのです。この世界の創造は、天空にあるドリームタイムから虹蛇によって大地に夢の種子がもたらされたことによってなされたのです。種子は植物の夢を宿し、その夢を実際の形態に現して、この地上に生まれ出てくる。そして、地上のあらゆるものが、同じように、この地上に現れ出てくる。この宇宙全体が、このようにしてこの世界に顕現してきたのです。ドリームタイムは、内観さん、貴方の言っている“写像”が、どのようにこの地上に映し出されたかを物語っている神話なのです。人間の意志によって、そのドリームタイムが現実のものとなり、またそれが、そのドリームの元に反映してゆくのです。だから、人間が居なくなったら、この世界は無くなります。そうです、この世界全体、時間も空間もすべて、人間の意志によって作り出され、それが綿々と続いているのです。内観さん、将に貴方のおっしゃっていた内容と同じじゃないですか？しかし、わたしの疑問は、先ほども言ったように、どうしてアボリジニがこのような過酷な運命に遭遇しなければならなかったのか、それが必然なのか、あるいは、ドリームの元に変化が起きているのか、そこが分からなかったのです。でも、説明をお聞きすると、貴方のおっしゃっていることも、可能性としてあり得るような気がしてきました。ドリームとして展開しているこの世界の終焉か、または、大変革の時期に差し掛かってきているような

気がしています)

長老は坂道を辿り、崖の下まで3人を連れて行った。崖の下には、小川が流れていて、その周辺には大小様々なマガンタやモルガと呼ばれる木々が茂っていた。崖の壁面に造られたいくつかの洞窟が見える。長老が口笛で鷹の鳴き声のような音を出すと、洞窟の中や、遠くの藪の中から、陽に焼け、赤土に汚れた顔をした人々が三々五々集まって来た。男性が7人、女性が10人だった。皆それぞれ、あまりきちんとした服を身に付けていない。中には何日も洗っていないと思われる、汗の衣魚着いた服を着ている者も居た。子供たちの姿は無い。長老が大人だけを呼び集めたのだと賢は思った。賢はここに集まった人たちの顔を瞬時に認識した。すべての人々の容姿を脳裏に焼き付けた。長老が全員に向かって何か言った。全員が長老と賢たち3人を囲んで円形になって、赤土の上に座った。長老も3人に土の上に直に座るように言うと、自分も座った。

「*****」(これから、我々の生活をお見せします。いいですか？この現実の世界でお見せするのではなくて、ドリームの中で、ここにいる者たちと共に生活してもらいます。半年間、生活を共にしてもらいます。内観さん、お嬢さん、そしてガイドさんできますか？)

賢が応えた。

「*****」(時空を超えて、別次元に入るのでですね。僕はできると思います。梓は、僕が導きます。畑村さんは・・・)

梓は賢の方を見た。賢にすべて任せようと考えた。畑村が、すこし戸惑いを見せながら言った。

「*****」(どうすればいいのでしょうか？)

長老が言った。

「*****」(瞑想するのです。意識の世界に入って、そこで生活します。たぶんこの世界の時間で1時間くらいでしょう。もし、認識できなくても、その間は黙って瞑目しててください)

畑村が頷いた。長老が17人の人たちに種族の言葉で話をした。全員了解した。長老が種族の言葉と英語で瞑想に入る合図をした。賢は瞑目し、

瞑想に入った。梓の姿が見えた、梓はきょろきょろしている。賢が手招きして、自分の近く呼び寄せた。そしてふたりはその場に立っていた。17人の人たちは皆、元居た場所に帰って行った。長老がゆっくり立ち上がって、賢と梓に自分の住まいまで戻るのに、附いて来るように言った。洞窟に着くと、長老はふたりに中に入るように促した。中は真っ暗だと思っていたのだが、どこからか光が差し込んでいる。上の方に明かり取りがあるようだった。10㎡ほどの広さがあり、端の方に炊事でもしたのか、火を炊いたような、壁面に黒い煤の付いた場所がある。それ以外はどう見ても、ただの洞穴（ほらあな）に過ぎなかった。長老が言った。

「*****」（今日から暫くの間、ここで生活してもらおうよ。すべて、自然の中の生活だ。わたしはいつもここにいる訳ではない。時々、人と話すときなどにここに戻って来るだけだ。それも、何時と決まっている訳ではない。ここでは、時間というものは無いのだ。しかし、君たちは、これまで都会の中で生きてきているから、夜は部屋の中でないと、落ち着かないだろう。だから、ここを住居として使ってもかまわない。今日は、君たちがはるばる我々を訪れてくれたので、歓迎のための催しをやる。さっき、みんなに伝えておいた。夕方陽が落ちたら、さっきの場所に降りて来てくれ。わたしは、これから狩りに出掛けてくる）

賢はどうしたらいいのか分からずに長老に尋ねた。

「*****」（僕たちは何も持って来ていません。小さいバッグだけしかありませんが・・・それと、畑村さんの姿が見えないのですが・・・）

「*****」（何も心配することはないよ。ここは母なる地球の上じゃないか。生きるために必要なものは何でもある。君たちは我々アボリジニの生活を体験するためにここに居るのだろう。ただ、自分の内側から響いて来る言葉に耳を傾けていれば、自ずと行動すべきことが分かる。そうだった、ガイドのことだね。彼は別のところに居るよ。また会えるから、心配しなくていい）

そう言い残すと、長老はふたりを残してさっさと出掛けて行ってしまった。梓が言った。

「賢さん、どうしたらいいのかしら？わたくし、到底こんなところでは、生きていけそうもないわ。何とかしないと……」

「梓、さっき長老が「自分の内側から響いてくる言葉に従え」っておっしゃっただろう。そうしてみよう」

「わたくし、内側からなんて、何も聞こえてきません」

「じゃ、暫くは僕の言うとおりに行動してみてくださいませんか？今ね、僕は外に出てみようと思っている。この周りがどうなっているか、知りたいんだ。僕に附いて来て」

ふたりは洞窟の外に出てみた。まだ陽は高い。賢は自分たちが昼食を食べていないことを思い出し、急に空腹を感じた。はじめに訪れたとき長老の話聞いた場所に行ってみた。長老がバスケットに入れて出してくれたビリーゴートプラムがそのまま置かれていた。賢がバスケットを持って梓に差し出すと、梓はその中から、プラムを3つ取った。賢も一つ取ると、かぶりついた。梓は一つ食べ終わると、残りの二つもぺろりと食べてしまった。

「梓、おなかが空いたのか？」

「わたくし、セドナ以来、プラムが大好きになっちゃったんです。もう一ついただいてもいいですか？」

賢が頷くと、二つ残っているプラムの一つを賢に渡し、自分が最後の一つを取って、ガリッと噛んだ。ふたりは洞窟に戻ってバスケットを置くと、坂を下った。途中で、先ほどの10人の女性の内の一人に出会った。彼女は長老のバスケットより少し大きめのバスケットを手にしていて、その中に、何かの虫の幼虫がたくさん入っていた。幼虫は動いていた。女性はふたりと行き交うときに下を向いて、目を合わさないようにしていた。賢と梓は女性の横を通り過ぎるときに頭を下げた。暫く坂を下ると、先ほどの広い場所に出た。そこにはパンツしか身に着けていない4、5人の子供たちが地面に何かを書いて遊んでいた。全員男の子たちだった。賢たちの姿を見ると、子供たちが集まって来た。賢も梓も言葉を知らない。何と言っているのか分からない。賢が英語で挨拶してみた。

「Hello!」（こんにちは!）

子供たちは、わいわい言っている。しかし、賢と梓には何と言っているのか分からなかった。そこに一人の30歳くらいの鼻の低く広がった、色の黒い男性が近づいて来た。賢の近くに来ると、男性は訛りのひどい英語で言った。

「****」(さっきの人たちですね。はじめまして。俺はヨルブといます。ここには何しに見えたのですか？民族学の調査ですか？それとも写真家？でも写真機は持ってないから、違いますね)

賢は自分たちの紹介をした後で、意識改革の参考にするために日本からここに来たと説明した。ヨルブは頷いていたが、日本ではそんな意識改革が必要なかと聞いた。賢は、世界中どこでもそれが必要だと言った。ヨルブは自分たちにも必要なかと聞いた。賢は、それは必要ないと応え、日本人に、どうしたらこのアボリジニの人たちのような生き方に戻ることができるのかを、思い起こさせる必要があると言った。ヨルブは頷いていた。賢と梓は一旦ヨルブと分けられると、沢に出してみた。川幅は5メートルほどあるが、水はあまり流れていない。3人の女性が居て、先ほどすれ違った女性が持っていたのと同じようなバスケットを横にして水中に入れ、何かを獲ろうとしている。もう一人の女性はバスケットの底を水に浸けていた。ふたりは暫く女性たちの行動を眺めていたが、やがて梓が女性たちの方に向かって、少しずつ近づいて行った。一人のバスケットの底を水に浸けている女性が梓に気が付いた。しかし、女性は表情を変えずに、目を逸らせた。梓が近づいてみると、彼女たちはザリガニを捕っているのだった。目を逸らせた女性のバスケットの中にはたくさんのザリガニが入っている。バスケットを横にしてザリガニを捕っていた女性が顔を上げ、梓を見て少し微笑んだが、すぐにまた川の流りに視線を戻した。もう一人の女性は石を手で持ち上げて、身をかがめて岩の間をのぞき込んだりしている。梓は心の中で、「がんばってね」と言った。そのとき、3人とも同時に梓を見た。梓は「わたくしの心の声、聞こえたのかしら」と思った。賢と梓は再び広場に戻った。男たちがカンガルーを1匹捕まえて来ていて、手足を縛り、炭火の上に渡した棒に吊して火で炙っていた。梓はその光景が目に入らないように、下を

向いた。賢が暫く見ていると、二人の男性が棒に括りつけたままのカンガルーを地面に降ろし、竹のナイフで腹部を裂いた。そこから内蔵だけを取り出し、再び火に掛けた。賢と梓は、坂を上り洞窟の前に戻った。外の日差しは厳しい。一人の40歳くらいに見えるオレンジ色のワンピースを着た女性が藁で編んだ筵の様な物を持って来て、黙って洞窟の入り口の横に置いた。女性はふたりの方を見ると、日に焼け、唇と肌の色の見分けが附かない顔に僅かに微笑みを浮かべた。ふたりが英語でお礼を言うと、右側の前歯が欠けた白い歯を見せて笑顔を作った。女性は、恥ずかしげにその場から離れ、坂を駆け下りて行った。ふたりは洞窟の中に入り、しばし休息することにした。

「この筵を貸してくれたのね。これを敷けということかしら？これを直に敷くには、少し柔らかすぎるわね」

梓はそう言いながらも洞窟の冷たい岩の上に、女性の貸してくれた筵を敷き、賢を促して座った。

「彼らは何かの準備をしているのかな？それとも、これが彼らの一日の活動なのかな？」

賢が言った。

「人々の動きから見ると、何かのパーティの準備をしているように感じるわ」

梓はハンドバッグから手帳を取り出し、オーストラリアに入ってからからの行動の記録を書き始めた。賢はこの洞窟の中の場に意識を移した。暫くすると、一人の若い背の高い男性がやって来た。ふたりに出て来るように手招きしている。ふたりは洞窟から出て、男に附いて広場まで降りた。先ほどの男女が大勢で食事の準備をしていた。カンガルーは解体されていて、肉も、内蔵も、骨も、すべて大きな葉の上にきれいに並べられている。肉は焼き上がっていたが、内臓は生のままのようだった。その横には白く薄いパンのようなものが4、5枚置かれていた。長老と10人ほどの子供達、そして2、3人の男性が周りに陣取って座っている。子供達は物珍しそうに、ふたりの方を見て何か話し合っている。賢たちが近づくと、筵を貸してくれた女性が、抱えていたバスケットを下に降ろ

して、賢たちに座るように手招きした。賢と梓は長老の横に座った。円の中央では女性達が焼き上がった肉や内臓を木の皮に包んでいる。長老が賢たちに視線を向けて、「あの動物はカンガルーで、包んでいる木の皮はメリューカの木のだ」と言った。一人の女性が賢たちの前に肉と内臓の包んだ固まりを持って来て置いた。もう一人の女性が千切ったパンのようなものと焼いたザリガニを木の葉の上に載せて持って来た。長老が、「それはソテツの実から作ったパンだ」と言った。先ほど筵を貸してくれた女性が、白い細長い実の入っているバスケットから一握り取り、木の葉の上に載せて持って来て、ふたりの前に置いた。その後から先ほどふたりの視線を避けた女性が、大きな鍋から椰子の様な実を割った椀にスープを注いで、それを持って来て木の実の横に置いた。女性はやはり、下を向いていてふたりを見ようとしなかった。周りに居た者達はそれぞれ立って自由に料理を取りに行き、自分の席の前に並べている。全員の料理が用意できると、長老がアボリジニの言葉で言った。そしてそれをそのまま英語に訳して、ふたりに伝えた。

「****」(みんなに話したとおりに言うよ。「今日は、日本から来た我々の大切な客を紹介しよう。男性は内観賢さん、女性は田辺梓さん、ふたりは日本中の人たちの心が物質重視の方向に偏りすぎているので、それを、精神的なものを重視する方向に変革するという、意識改革を進めている。ふたりは我々の生活を学ぶために来ている。ふたりはわたくしたちの兄弟であり、友である。今日は、ふたりの歓迎の夜を過ごそう。まず、共に食事をし、それから、我々が精霊と共に過ごす時間を一緒に過ごして貰う。それでは、食事を始めよう」—以上だけど、何か言うことがあったらどうぞ言ってください)

賢と梓は立ち上がり、先ず頭を下げた。それから、賢が英語で挨拶した。

「****」(皆様、僕たちを受け入れてくださって、ありがとうございます。日本から来た内観賢と申します。よろしくおねがい致します)

「****」(わたしは、田辺梓です。わたくしたちのために、いろいろしていただき、ありがとうございます。わたくしは自然の中で生きることは初めての事です。どうしていいのかわかりません。ど

うかいいろいろ教えてください)

長老がふたりの挨拶を通訳して話すと、ほとんどの者が、軽く頷きながら聞いていた。しかし、何人かの男女はふたりの方に視線を向けずに下を向いたままだった。長老の合図で食事が始まった。パンはちょっと独特のにおいがしたが、味は栗を思わせるもので、美味だった。ふたりとも肉は食べられたが、内臓は食べるができなかった。ザリガニは臭みもなく伊勢エビに似た味で美味しかった。スープはこってりとしていて、まるで豚骨ラーメンのスープの様な味がした。昼食がプラムだけだったので、ふたりとも食欲があった。3センチ前後もある白い細長い実はもちもちしていて、少し甘みがある。長老がそれはバナヤ松の実だと言った。皆、あまりしゃべらずに、黙々と食事をした。食事が済むと、女性達が立ち廻って後片付けを行った。男達はカンガルーを捌いたときに使った道具を片づけた。長老が「暫くの間休息をする」と言った。日が傾いていて、広場には背丈の高い木々の間から、夕日が差し込んできていた。男女は皆、別れ別れに散って行った。子供達の何人かは親に附いて、また何人かは自分でねぐらに戻ってゆくようだった。長老がふたりにドリームタイムの話語ってくれた。

「****」(わしらの生活はドリームそのものなのだ。わしらは先祖からずっと伝承されてきたドリームを生きているのだ。わしらの意識はいつも覚めている。寝ているときも、起きているときも、ずっと気が付いている。無意識になることはない。この大地は歴史家が謂うように、偶然が重なって出来ていったものではない。創造されたものなのだ。我々の大昔の祖先は、虹の蛇によって天空からドリームタイムを与えられた。そのドリームタイムの潜在力は海を創り、山を創り、魚を創り、草木を創った。そしてまた天空に戻っていった。地球という大地には今もそのエネルギーが蓄えられていて、我々と同じようにその力で生き続けている。もっとも、今は人間達はその地球の皮膚を剥ぎ、はらわたをえぐり取って、エネルギーを弱めてしまっている。この地球はこの世界が創られた時の記憶を宿していて、精霊によって、その知恵と勇気が我々に与えられる。我々自身は何もする必要はない。ただ、地球とあら

ゆる創造物に感謝し、身を清め、敬虔な心を保っているだけで、精霊がどのように生きればいいのか我々を導いてくれる。我々は、日々精霊の言葉を聞き取れるようにしているだけでいい。あらゆるものに精霊の魂が宿っている。それはこの世界が創造されたときから宿ったものだ。我々アボリジニの祖先は種族ごとに、その精霊の宿った創造物を守り抜くことを誓った。それが種族の持つトーテムなのだ。我々は時として精霊と共に踊り、歌う。その時、我々の身体には精霊が宿る。精霊は喜びそのものだ。我々を天空の世界に導いてくれる。我々にとって最高の時間だ。今日は、あなた方にもそれを体験させてあげよう。わしはあなた方が我々と同じような意識で生きていることを知っている。だから、われわれと共に生きる生活の中で、お互いの不足している部分を補い合いたいと思っている)

陽は沈み、辺りが薄暗くなった。どこからともなく、先端に火を点けた木の枝を手にして、大人達が集まって来る。顔に白い色の線模様を書き込み、はちまきをしている。それぞれが、一種異様な雰囲気を漂わせている。女達は腰に木の葉をちりばめた飾りを付け、顔に白色の模様を書き込んでいる。よく見ると、皆、それぞれに違った服装をしている。特に決まった形があるようではなかった。一人の背の高い男性が長い棒のようなものを持って来た。長さが1メートル以上ある。長老が、「シロアリが芯を食べてしまったゆうかりの幹を、切って削ったディジュリドウという楽器だ」と教えてくれた。三々五々集まってきた人たちが丸い円を作り、地面に座ると、長老が何か言った。すると全員、大地にひれ伏した。賢と梓もそれを真似て、両手を前に出して大地に頭を押し付けた。賢はあらゆる精霊に感謝を捧げた。梓はただ心を空しくして、形だけ、アボリジニの女性達の取っているポーズを真似た。暫くして身体を起こすと、ディジュリドウを手にしていた男性が立ち上がり、棒の端に口を付けて吹き始めた。低い音に、高音の混じった振動の音は心の底まで響く。音が辺りに静けさをしみ込ませていった。ディジュリドウの演奏は1時間ほど続いた。身体が独特な音のバイブレーションに同期して痺れてゆくように感じてきた。演奏が終わると全員瞑想に入っていた。

賢と梓は時間の経過が分からなくなった。そのうち、まだディジュリドウの演奏が始まった。今度は躍動的な演奏である。人々が立ち上がり、音に同調するように踊り出した。皆それぞれに自由に踊っているようだ。大地を踏みしめ、両手を空高く翳したり、大きく広げたり、また、小さく縮こまる様にしたりして踊っている。賢と梓も立ち上がった。身体が痺れているような感覚が一層強くなってきた。手足が自然に動いた。ふたりは人々の中に入って踊り続けた。感覚と思考は消え、意識だけがはっきりとしていて、虚空にあるようだった。賢の意識の中に梓も現れ、ふたりで踊り続けた。空がほんの少し明るくなってきたような気がした。長老が大きな声で、何かを言った。全員静かに元の位置に戻り、大地に平伏した。賢と梓も平伏した。しかし、今度はみんなを真似たのではなく、自然にそうになった。やがて長老の合図でダンスは終わった。しかし、その場にそのまま横になってしまうものも、どこかに戻ってゆくものもあり、ばらばらになった。長老がふたりに言った。

「*****(精霊と共に踊るのは楽しいだろう。今日はこれで休みなさい。わしは外で眠る。君たちはまだ慣れていないから、洞窟で休みなさい)

賢と梓は長老に礼を言うと、真っ暗な坂道を手探りするように登った。梓は賢に身を寄せるようにして歩いた。歩き始めると、月の光で道が浮き上がってきた。

「賢さん、わたしは、賢さんと出会えて幸せです」

「心に溜まっていた澱が、清められたようだね。すがすがしい」

賢は梓を引き寄せて歩いた。入り口から見る洞窟の中は、漆黒の闇だった。だれかが1枚の莫産(ごぞ)を置いていってくれたようだった。入り口の横に立て掛けてある。賢は莫産を持つと、梓の手を引いて洞窟の奥に進んだ。やはり中は真っ暗だった。明かり取りからほんの僅かに入ってくる月の光には洞窟の中全体を明るくするだけの力はない。ふたりは手探りで、記憶に残っている岩のでこぼこを避け、先ほど座っていた柔らかい筵を取りのけて、平らなところに莫産を敷いた。賢は梓の手を取って静かに、莫産の上に横になった。梓の荒い息づかいが耳に響く。

賢は梓の肩に手を置き、そっと引き寄せた。梓の心臓の鼓動が激しくなった。

「梓、初めてか？」

梓の頷いたのが感じられた。梓は小刻みに震えていた。梓は自分の胸の前に両手を置いて、賢との間に隙間を作ろうとした。賢がその両手を押し広げて梓の胸の中に頭を埋めると、梓は両手で賢の頭を抱きしめた。梓は声は出さなかったが、息づかいは益々荒くなっていった。賢が入ったときも梓は、「はっ」と一息ついただけで、呼吸を止めているようだった。賢を抱きしめる腕の力が、抜けたようにだらりとなった。……………翌朝、気が付くと、もう陽が高く上がっているようで、洞窟の中も明るくなっていた。昨日女性が持ってきてくれた筵(むしろ)が役に立った。女性は、この地が夜になると冷え込むことを知っていて、気遣ってくれたのだった。昨夜ふたりは冷たさが伝わってくる石床に敷いた莫蔭の上で、身体に筵を掛け、抱き合って寝た。

賢が起きあがって、洞窟の外に出ると、梓は、身の周りの汚れを確認して、筵と莫蔭を片付け、身だしなみを整えた。ふたりを空腹感が襲ってきた。

「梓、いい天気だぞ、また暑くなりそうだな」

「賢さん、わたし……………」

「どうした？」

「わたし、どうしたらいいのかしら？賢さんには、祐子さんも、亜希子さんもいらっしゃるのに……………」

梓は下を向いたままだった。賢は梓を連れて坂を下りて行った。

「君は僕の女房じゃないか」

ふたりが広場に出ると、筵を持って来てくれた女性がバスケットを持って寄って来た。賢と梓が

「おはようございます」

と日本語で言った。英語より日本語の方が彼女には感受できるようだった。彼女はにっこり笑って、

「アヌング」

と言うと、バスケットをふたりの前を出して、食べるというジェスチャーをした。バスケットの中には沢山のパンの切れ端と昨夜のバニヤ松の実が入っている。ふたりはパンを一切れずつと、バニヤ松の実を少しずつ摘んで取った。女性はもっと取れというポーズをした。ふたりは掌一杯の実を取った。それが朝食だった。空腹感は収まったが、朝食を食べたという実感が湧かない。そうこうしているうちに賢のところへ昨日カンガルーを捌いていた男がやって来た。その男は、自分を指さしてウクルックムと言った。賢は握手を求めた。ウクルックムは賢を指さして「ケン」と言った。ケンは頷いた。森の方を指さし、一緒に来いと言っているように賢には思えた。賢と梓が一緒に行こうとすると、梓に向けて両手を広げ、だめだと言うポーズをした。賢は梓のことが心配だったが、梓が頷くので、後から合流してきた男達5人と一緒に出掛けた。梓は仕方なく木陰を探してそこに腰掛けた。暫くすると、バニヤ松の実をくれ、筵を貸してくれた女性が6人の仲間を連れてやって来た。先を平たく削った1メートルほどの棒を持っている女性や、大きな空き缶を手にしている者も居る。梓に賢たちが行った方角と逆の方角を指さして、一緒に行こうというジェスチャーをした。梓は頷いた。梓は女達の後に附いて、スピフェックスの茂っている砂漠の道を1時間ほど歩いた。やがて少し背の高い木々が立ち並んだ林に入って行った。日差しは次第に強くなって来る。梓は陽に焼けると肌がひどく荒れる。日焼け止めを持ってきたのだが、それはホテルのスーツケースの中に置いてきてしまった。林の中を暫く歩いてゆくと、沢のような場所に出た。その先には外周100メートル程度の池があった。筵を貸してくれた女性が小石を拾った。梓にも拾うようにジェスチャーで示した。梓も1つ拾った。女性達は全員石を拾ったようである。女性が石を池に投げ入れるポーズをした。梓は頷いた。皆一列に並ぶと、誰も号令を掛けるわけではないが、タイミングを合わせて、一斉に石を池に向けて放り投げた。石が池の中に落ちて音を立てた。筵の女が声を出して何か言った。全員頭を下げて祈りを捧げている。梓も真似をした。梓は「きっと池の精霊に祈りを捧げているのだ」と思った。心の中で

「初めて、森に入らせていただきます。よろしくお願ひいたします」
と言った。箆の女は微笑みながら頷いた。女性達は更に林の中を進み、その先の背丈が低い灌木の茂る道に出た。女達の内、梓に接近して来るのは箆の彼女だけだった。女達が灌木の茂みに入って行った。それぞれ一本の木を選んでるようだ。小石を取り除けて、幹の周りを掘り起こし始めている。箆の女が梓に来るように手を振った。掘り返した灌木の根元に5センチほどの白い幼虫が4、5匹動いている。箆の女はその内の一つを摘むと土の塊を落として、口に放り込んだ。梓は一瞬目を伏せた。女はおいしそうにそれを食べた。そして、また一匹摘むと、今度は梓に渡してよこした。梓は、首を横に振った。後ろの方で、一人の女性のくすくす笑う声がした。梓は思った。ここで生きるためには、ここの生活に慣れるしかない。梓は、目を瞑って、差し出された幼虫を掴んだ。柔らかく、マシュマロのような感触だった。梓は口の中で

「マシュマロ、マシュマロ」

とつぶやいた。そして、そのまま一気に口の中に放り込んだ。心で

「えいっ」

とかけ声を掛けて、ひとかみ、ふたかみ、みかみすると飲み込んだ。とろっとしたものが喉を通り抜けると、「ふっ」とため息を吐いた。また後ろの女性がくすくす笑った。飲み込んでみると、恐れていたほど後味は悪くなかった。一人の女性が口の広い長さ20センチほどの缶を持っている。女達は銘々採った幼虫を掌に載せていて、掌が一杯になると缶を持った女性のところに入れに行った。暫くして缶が一杯になると、女達は木陰に集まった。缶の女性が缶を掲げて見せた。みんな目を瞑り、頭を下げた。どうやら精霊への祈りを捧げているようだ。梓も真似をした。やがて、一人の身体のがっしりした、色黒の女性が歌を歌い始めた。女性達は一斉に声を合わせて歌った。1曲歌い終わると、一人のまだ25、6歳にしか見えない小麦色の肌の女性が、梓のところに来て来た。都会に住む女性なら、身体の線を細く見せるための工夫を凝らしているのだが、彼女は、そんなことには意識が向いていないようで、だぶついた褐色の服を着ている。腕に色とりどりのブレスを嵌め、首の回りに木

の実を繋いで作ったネックレスをしているだけだ。しかし、身体は均整が取れていて、足は細く長い。はち切れそうな胸は、若さを象徴していて、健康なエネルギーを発散している。梓の近くに来ると、

「アヌング」

と言った。梓はその言葉を朝も聞いた。きっと「Hello」（こんにちは）なのだと思った。梓も

「アヌング」

と応えた。女性はにっこり笑った。周りにいた2人の女性も笑顔を見せた。女性は梓の靴を指さして

「プクリ、プクリ」

と言った。どうやら靴のことをプクリと謂うらしい。梓は自分のトレッキングシューズを脱いで、女性に見せた。女性は珍しそうに、それを裏返したり、横を向けたりして眺めていたが、直ぐに返してよこした。女性達は履物を履いていない、素足のまま歩いている、足は砂埃で白っぽくなっている。梓は、全員が裸足でいる中で靴を履いている自分が不自然に見えてきた。それにしても、「よくこんな石の多い道を素足で歩けたものだ」と感心して、女性の足をしげしげと見つめていると、女性達が、笑った。そして、身体のがっしりした女性が2曲目の歌を歌い始めた。単調なリズムだけの歌のようだったが、聞いていると心地よかった。全部で5曲歌った。歌を歌い終わると、女性達は元来た道に戻り始めた。広場に着くと、昼を回っていた。女性達には、昼食の時間は関係ないようだった。男達もまだ戻っていなかった。梓は疲れを感じていた。めまいを感じて、ふらふらとした。木陰に入ってみたが、一向に気分がよくなる。筵の女が近くに来て、何か話した。その声も耳の奥でガンガン響くだけで、単語の判別もできない。そのうち意識が朦朧としてきて、梓はその場に倒れ込んでしまった。気が付くと、梓は莫藎の上に寝かされ、頭には草をすりつぶしたものが塗りつけられている。胸から首にかけても同じような草のすりつぶした塊が載せられていて、筵の女が練り上げたものを木のへらに載せて、梓の口の中に押し込んでいる。梓は目を開いた。

「アズサ、*****」

梓には「梓、だいじょうぶか？」と言っているように感じた。頭が割れるように痛い。しかし、筵の女の声ははっきり聞きとれた。その声が、優しい母の声のように感じられた。梓は

「ありがとう」

と日本語で言った。筵の女が微笑んだ。賢たちが戻ったのは梓の意識が戻ってから、まもなくのことだった。陽はもう傾いてきていた。

賢は男達と、狩りに出掛けていた。獲物は兎だった。2匹捕まえた。男達は、見事に兎を罠に追い込んで捕らえた。彼らが動物の習性を熟知しているのに賢は驚きを隠せなかった。広場に戻ると、奥の洞窟の前に人々が集まっている。男達の内、その家で寝起きしていると思われる男が、駆け出して行って、洞窟の中に消えた。賢は梓の姿を探した。広場には見当たらなかった。賢は坂の上の洞窟に行ってみることにした。坂を上り始めると、先ほど駆け出していった男が戻って来て、賢の腕を掴んで、戻って来るように促した。賢は男に附いて戻り、男の洞窟に入ってしまった。そこには梓が墓茱の上に横になっていて、頭と首の周りに青いものが擦（なす）り付けられていた。一人の女性が梓の横に座り、口の中に、何かを押し込んでいた。梓は目を閉じていた。賢は急いで梓の近くに近寄ると言った。

「梓、どうしたんだ。大丈夫か？」

梓はゆっくり目を開けた。

「賢さん、わたくしどうしたのかしら、広場で分からなくなったの。そうして、さっき気が付いたら、この人が介抱してくださっていたの」

賢は筵の女性に

「ありがとう」

と日本語で言った。梓も

「ありがとう」

と言った。女性は乾いて白けた唇の間から白い歯を出して、にっこり笑った。賢が梓の手首を握ると、熱があるのが分かった。昨夜のことが思

い起こされた。冷えた床の上で、疲れていた梓を抱いたのがいけなかったと思った。

「梓、ごめんね。早く元気になってくれよ」

「賢さん、さっきより、ずっと良くなったわ」

「何かほしいものはないか？」

「お水がほしいわ」

賢は筵の女に手真似で水を飲んでいる格好をして見せた。筵の女は奥の方から空き缶に入った水を持って来た。賢は女が差し出した缶を受け取ると梓の背中を抱き起こして、水を飲ませた。梓は「はっ」と熱い息を吐き出した。口の中に菓の苦さとハーブのような菓草の香り広がった。梓は右手で心配そうにしている筵の女の手を取った。感謝の気持ちがあふれ出てきて、目から涙が流れるのが分かった。梓は左手で自分を指さし、「アズサ」と言ってから、筵の女の胸を指さした。筵の女は恥ずかしそう「ユンリ」と言った。黒い肌の奥にある、心の奥を見つめているような慈愛に満ちた瞳、生命力に溢れた、低くつぶれた鼻、砂埃で白くなっている頬に出来た笑窪、その笑顔は、梓がこれまで見た笑顔の内、どの笑顔より純粹で美しいと思った。

「ユンリ、ありがとう」

ユンリは梓の手を握り返した。ユンリの夫が外からプラムを持って入って来た。プラムを梓に渡しながら、

「ピメ、*****」

と言った。梓は嬉しそうにそれを受け取って、

「ありがとう」

と言った。ユンリが

「ピメ、*****」

と同じ言葉を繰り返した。賢は察した、部屋の外に出てみると、案の定、若い女性が立って、心配そうに中の様子を伺っている。その周りにも5、6名の女性達が地面に座り込んでいた。賢が女性に

「ピメ、さんですか？」

と言ってみた。女性は頷いた。賢は

「ありがとう」

と言った。ピメはにっこり笑った。賢は梓のところに戻って、

「そのプラムは、ピメという25歳くらいの女のひとが持って来てくれたようだよ。彼女、外で心配そうに中を伺っているよ」

と言った。梓は、それが先ほど自分の靴を珍しそうに見ていた女性だと思った。お礼に行かなければと、身体を起こしかけたが、ユンリに止められた。梓は心の中でピメに向かって、「ありがとう」と言った。陽が沈んで辺りが薄暗くなってきた。梓は重い身体を起こして、自分の洞窟に行こうとした。しかし、ユンリが優しく梓の肩に手を掛けて何か言った。「ここにいなさい」という意味のようだった。結局賢もそこで一晩過ごすことにした。ユンリと夫は奥の方の壁にもたれかかって休んだ。賢も梓の脇に座ったまま夜を明かした。賢が梓の熱を見ようと、時々目を開けると、ユンリは決まって起きていた。見ていると、彼女は梓の近くに来て、頭や胸の上のすりつぶした薬草を交換したり、梓の口に水を注いだり、薬草を食べさせたりしているのだった。賢は「この女性には自分と梓の、個としての境界線がない。ユンリは全く眠っていない。ユンリにとって梓は自分自身なのだ」と思った。

翌朝、梓はすっかり良くなっていた。目覚めは昨日の朝よりよかった。賢も目を覚まし、梓の熱を診た。もう平熱に戻っている。ユンリが梓のところに来て、両手で梓を支えるようにして立たせようとした。梓は足を力を入れて立ち上がった。一度大きく頷くと、

「ユンリ、ありがとう」

と言った。ユンリも頷くと、梓に外に出るように促した。梓の身体に日差しが差し掛かってきた。しかし、梓はそれを全身で受け止めることができた。ふと、洞窟の周を見ると、昨日一緒に採集に出掛けた女性達が地面に座っていた。徹夜で梓を見守っていてくれたのだった。梓の目から涙が流れ出てきた。靴を見た女性が入り口の近くに居た。梓は近寄ると

「ピメ、ありがとう」

と言った。梓の靴を見た女性は

「アズサ、*****」

と梓の顔を覗き込むようにして言った。梓は

「もう大丈夫よ、ありがとう、貴女の優しきは忘れないわ」

と言った。ピメは嬉しそうに微笑んだ。梓は、地面に座っている女性達一人一人に、お礼を言って歩いた。梓の「ありがとう」と言う言葉が、彼女たちには嬉しいようだった。昨日は梓と目を合わせないようにしていた女性達も梓の元気そうな姿に、少し顔を上げて、作り笑いのような微笑みを見せた。梓は思った。

「ここに住んでいる人たちは、何と心の優しい人たちなんだろう。ちょっと見たところは分からないけど、わたしはこんなに優しい心を持った人たちを知らない。ほんの一日一緒にいただけで、夜を徹してわたしのことを心配してくれた。この人たちは目に見えない世界に生きている。ここに来て良かった」

その日、梓は自分の洞窟に戻り、そこで一日を過ごすことにした。ユンリもこの日は家に留まっているようだった。時々、果物や、薬草を磨りつぶしたペーストを持って来てくれた。ユンリはペーストを持って来るときは一緒に水も持って来た。意識が朦朧としていたときは、口に押し込められているものが何なのかと考える力も無かったが、元気になってみると、薬草のペーストは強い匂いがして、なかなか喉を通らない。ユンリの差し出す水で喉の奥に流し込んだ。

賢は梓が回復したので安心したが、その日は一日梓の近くで過ごした。それから何日かが過ぎ去った。賢と梓は毎日部族の人たちに附いて、狩猟と採集をする生活をした。部族の人たちの名前もすべて覚えた。いくつかの言葉も話せるようになった。賢は毎晩のように梓を抱いた。梓も妻としての自分を意識し始めた。賢に抱かれるたびに喜びを感じるようになっていった。ふたりは朝まで抱き合って眠るのが常となった。梓はパンの焼き方を憶えた。パンは、焼く前の日に、女達から分けて貰った小麦粉に水を入れて捏ね、ゆうかりの葉に包んでおいて、翌朝焼くのだった。梓は女達に頼んで、手に入れた木の水桶に水を貯めておき、朝起き出すと、湯を沸かし、パンを焼き、近くで採れる木の葉を陽に干し、

揉んで作った茶の葉で紅茶を入れるようになった。ある日、長老が戻って来て、賢と梓に言った。

「****」(君たちはもう、夫婦になった。ケン、君はわしの息子になりなさい。アズサ、君はアングブジとユンリの娘になりなさい。これが君たちのマルクだ。ケン、君はこれからジュンガライと呼ばれる、アズサ、君はナンガラと呼ばれる。ふたりは夫婦として生きる。もう、理解していると思うが、君たちには沢山の父や母がいる。そして、まだ授かっていない子供達がいる。兄弟達がいる、叔父や叔母がいる。沢山の動物たちが君たちの仲間で、それぞれに精霊が宿っている。ケンにはアズサの他にも沢山の妻達がいる。アズサにはケン以外にも沢山の夫達がいる。ふたりともこの網の目のようなつながりを大切にして、生命の本質を理解しなさい)

ふたりは喜んだ。賢は今まで、自分は頭の中で、すべての人たちが共通の本質を持っていると考えてきたが、アボリジニの人たちは、太古の昔から、ずっと、生きる場面でそれを具現化してきたのだということを知った。梓は自分が賢の本当の妻として、認められたことを、「將に夢の実現だ」と思った。「これこそ、ドリームタイムだ」などと考えて、少しずれているかなどと思い直した。この日から、梓は賢のことを「あなた」と呼ぶようになった。

ある晩、真夜中にふたりは外に出てみた。その晩は月もなく、辺りには全く光がなかった。ふたりは洞窟の前の地面に仰向けになって寝ころび、空を見上げた。賢が言った。

「梓、ここの人たちは、死んだら、星になるって思っている。君はどう思う？」

「わたくしは、いつもあなたがおっしゃるように、肉体を抜け出した魂が別の次元に移って、そのまま永遠に生きてゆくと思っているわ。ここの人たちの死後に星になる話は、想像の世界のように思えるわ」

「僕が、この世界が真実の世界の写像だと考えていることは、君も知っているだろう？」

「ええ、知っているわ」

「じゃ、その写像って、どうやったら出来るか分かるか？」

「この世界が写像だってことだって、理解できていないもの。どうやってその写像が出来るかなんて、思ってみたこともないわ」

「僕はね、このアボリジニの人たちと共に生きてみて、それが分かってきたんだ。ここの人たちは、それを実現するような仕組みを作っていて、そのとおりに生きてきたんだ。だから、雨を降らせることも、風を吹かせることもできる。そして、何処で、誰が、何をしているかも分かる。これから何が起きるかも分かるんだと思う。だからね、自分たちが死んだら、精霊に導かれて、高く天に昇り、星になるというのもまんざら嘘でもないように思えてきたんだ」

「なんだか、夢の世界みたいね」

「そう、この世界は、夢の世界。自分でコントロールできる夢の世界なんだ。だから、何でもできる。梓、また、空高く舞い上がってみよう。さあ、僕にしっかり抱きついていて、上昇するよ。無限の彼方まで、飛んで行ってみよう。意識の力で」

「あなた、途中でわたくしを放さないでね」

賢は先ず、周りに自分達を取り巻く空気の空間が出来ていることを想定した。そして、ゆっくり意識を拡大してゆき、空間全体を自分の意識で充たしてから、自分と梓の存在する位置を上方に移動させた。身体がどんどん上昇してゆく。梓は賢の背中に自分の身体をぴったり着けて、賢の腹の部分に両手を回し、指を組んだ。賢は両手を広げて飛び立った。その勢いは次第に加速し、天空高く上がって行った。不思議なことに、温度の変化も、空気が希薄になることもない。やがて太陽が地平線に見え始め、球形の地球が意識されるようになってきた。更に高く上昇すると、地球が青いボールの様に見えてきた。上昇は続く、月が近づいてきた。月が地球と同じような大きさに見えてきた。太陽が遙か彼方に光って見える。次第に上昇してゆくと、上昇しているのか、下降しているのか、分からなくなってきた。何時しか方向の意味が失われていることに気付いた。賢はそこで一旦止まった。どうやらそこは太陽系のどこかのようだった。太陽が異常に小さく見える。近くに環状の帯を持った星が

見える。それが土星であることが分かった。もう、地球も、まして、月も見えない。賢が言った。

「梓、ここがどこか分かるか？」

「そこに見えるのは土星じゃないですか？ さっき、月の近くを通りました。他の惑星には気付きませんでした。嘘みたいです」

「梓、ここには君と、僕と、土星しか存在しない。土星が僕たちをみている」

「あなた、不思議な感覚です。でも、どうして、わたくしたちはお互いが見えるのでしょうか。宇宙は真っ暗闇な筈なのに」

「それは、君の勉強した宇宙の姿だよ。宇宙の一面、物質面しか見ていないから、そう感じるんだよ。今、君には自分と僕が見えるだろう」

「はい、不思議です。でも、これもあなたの意識の中なのでしょう？」

「僕は、僕の意識を通してしか、世界を見られない。君は君の意識を通してしか世界を見られない。ここには重力が無い。だから、意識の作用で何かをし易い。一つ、ここで一つになってみないか？」

「えっ？ いや、恥ずかしい。そんなこと出来るのですか？」

「うん、ふたりきりだから、恥ずかしいことはない。どんな風になるのか、試してみよう」

賢と梓は身につけているものをすべて取り去った。脱いだ服はそっと空中に浮かせておいた。服を脱ぐときの慣性で、ふたりの身体は離れてしまい、次第に距離が遠ざかってゆく。賢は内力を使って、手足を動かし、自分の身体を梓の近くまで持って行った。梓は恐怖心で青くなっていた。賢が自分にふれるところまで戻って来ると、いきなり賢にしがみついた。賢は優しく、梓を捕まえて梓の身体を愛撫した。梓の硬直した身体が次第に柔らかさを取り戻してきた。普段取っていた体位が無重力空間では難しいことが分かる。すべて重力の助けを受けてできたことだった。梓は賢の首に腕を巻き付けて、絶対離れないようにしていた。賢が入ろうとしたときも、自分の内力だけでするしかなかった。梓も足を開いてそれを受け入れた。

「あなた、こんなこと、あり得るのですか？ これは現実ですか？ わたく

しはここでも妊娠できるのかしら？」

「精子は卵子に向けて突き進むから、肉体的には受精できるだろうが、魂が入らないだろうな。僕たちふたりしか存在しない場所だ。試してみよう」

賢はゆっくり動いて、中で放出した。梓は賢にしがみついた。ふたりは結びついたまま、近くに浮遊している衣類を掴んだ。賢は再び天空めがけて突き進んだ。光の速度を超えるのが分かった。ふたりは自分たちの姿が消えていることを知った。結びついていることすら忘れてしまった。遙か彼方に星雲が見える。気が付くとふたりは再び自分たちの姿を見ることができるようになっていた。これはかつて指宿のホテルで祐子と共に見た景色だと、賢は思った。祐子とふたりで見た時は、自分たちの本体までたどり着いて、銀の糸を伝わって、現実に降りて来た。しかし、今回は違っている。現実の世界を認識しながら、空間に上昇してきたのだ。下手に経路を替えて現実に戻ると、元いた場所に戻れない危険性がある。賢が言った。

「梓、銀河系宇宙が見えるか？」

「はい、見えます。アンドロメダ大星雲と同じような形ですね。きれいです」

ふたりは暫く、美しい銀河系の世界を眺めていた。

「今度は、一度、銀河系の星々のところに戻ってみよう。亡くなったアボリジニの人たちが、星の姿になったのを見てみよう」

「はい。素敵です。あなた、愛しています」

賢は意識を銀河系の中心に移動した。そこは沢山の星が集まっていて、目がくらむほど明るい。賢は意識を切り替えて、銀河系の外周に近い方に自分たちを移動させた。梓は自分の中に賢がいることを幸せに感じていた。

「あなた、ほら、沢山の星が・・・あそこにも、あっちにも」

賢は意識を一つの星に集中してみた。その星ができて間もない星であることが分かった。まだ、100年ほどしか経っていないと感じた。しかし、その時間感覚も、なぜ感じたのか不思議だった。ここには時間が無

い筈だった。アボリジニの一人の女性が兵士の服装をした白人に、夫の目の前で陵辱されて、その後で、別の白人の銃で狙撃され、殺される映像が見えてきた。彼女は衝撃で発狂したようになっていた。多くの意識が彼女の意識を取り囲み、救い出そうとしているのが見えた。介抱を受け、やっと落ち着いた彼女の意識が星になることを選んでいるのが分かった。それが目の前に輝いている星だった。

「梓、あの星を見てごらん、アボリジニの女性の星だよ。最後の人生は悲しい人生だったようだ。もう、生まれ変わりは無いんだろう。心が美しいから、星として輝ける。これからは何度も生まれ変わりを繰り返す白人達のすがたを眺めて生きてゆくのだろう。そして、アボリジニの人たちの生きている姿もね」

「あなた、本当のことなのかしら？不思議だわ」

「この世界は写された世界だよ。星になることもできる。本体は誰でも、そして、どんな生き物も共通なんだ。いずれはそこに戻るんだ」

賢が地球の洞窟の前に戻るように切り替えた。ふたりは光速を超えるスピードで空間を移動し、地球まで戻り、一気に地球の大気圏に突入した。熱は発生しなかった。ふたりは静かに洞窟の前に着地した。まだ裸のまままで結びついたままだった。梓は自分がここに戻っても賢と結びついていることに驚きを隠せなかった。

「あなた、本当のことだったんですね」

「本当も嘘もないよ。ここにあることが真実だ」

そう言うと、賢は静かに梓から出た。ふたりは手にしていた下着で身体を拭って、衣類を身につけた。ふたりは抱き合って、口づけを交わした。まだ真っ暗闇だ。ふたりは洞窟に入り、再び睦み合った。梓の歓喜の声は洞窟の中に響き渡った。

それから1ヶ月が経過した。梓は妊娠しなかった。梓は賢の言うとおりでと思った。

やがて、ここに来て半年が経とうとしていたある日の午後、賢と梓は休息を取るため、洞窟の外の木陰の地面に座っていた。一人の日本人男性が広場に来ていると、アングブジが言いに来た。広場に降りると、そこ

には部族の人たちが輪になって座っていて、奥に長老の姿があった。長老の横に座っているのは畑村だった。

「内観さん、田辺さん、ご無事でしたか？わたしもやっと皆さんの意識と連絡が取れました。これから皆さんの意識の中でお話しさせていただきますと思います」

「畑村さん、どうしていました？」

「どうしてって、僕は一生懸命、瞑想をして、やっとあなた達の意識にコンタクトできたところです。もうかれこれ1時間近くなるかな？やっとなです」

長老が言った。

「ジュンガライ・ケン、そしてナンガラ・アズサ、長い間我々と一緒に過ごしてくれてありがとう。君たちはもう、わたしたちのことは何でも知っている。そして、君たち夫婦は永遠にわたしたちと共にある」

賢は長老の手を取り、深く頭を下げた。

「我が父、ジャパルジャジ・カバルカフル・エルラミ長老、大変お世話になりました。わたくしたちはこれから、インドと中国を廻って日本に戻ります。日本に帰ったら、必ず、あなた方の生き方を元にした、精神性の改革を実現して見せます」

梓も言った。

「エルラミ長老、ありがとうございます。わたくしはここに来て、精神性を重視した生き方が何なのかを、身をもって知りました。そして、愛が言葉ではなく、存在そのものから出てくるものだと知りました。アボリジニの人たちの生き方が、この世界の中で、唯一最も高い精神性を元にした社会を維持していることも知りました。わたくしの夫、ジュンガライ・ケンと共にこの世界を生き抜きます。わたくしは精霊に、時期が来たら、子供を授けていただけるようお願いいたしました。わたくしはこの世界に生きることができて、とても幸せです。そして、ここの皆様と生きることができて、こんなに幸せなことはありませんでした」梓の目から、涙がぼろぼろこぼれた。賢と梓は長老の前から下がって、円座を作っている人たちに一人一人挨拶をし、抱擁をして廻った。女性

はみんな泣いていた。梓はユンリの前まで来ると、泣き伏してしまった。ユンリは目に一杯涙を貯めて、梓を抱き締めた。ふたりは暫くの間抱き合っていた。梓は、日本に居る実の母と同じように、ここにいるマルクの母ナパンガチ・ユンリも真実の母であると感じた。その光景を見ていた畑村が言った。

「****」(いったい、どうなっているんですか？ぼくには、全く分かりません。急にみんな親しくなってしまうて……)

長老が応えた。

「****」(あなたがふたりを連れて来てから、半年が過ぎているんですよ。ふたりはもう、以前のふたりじゃないんです。夫婦になりました。そして、ケン是我のマルクの息子、アズサはジャンピジンパ・アングブジとナパンガチ・ユンリのマルクの娘になったんです。このふたりはもうアボリジニです)

カルカッタ

賢と梓がインドのカルカッタに着いたのは2日後の10時40分だった。空港を出た時は既に昼近くになっていた。ブリクロンが待っていた。賢と梓はタイのバンコク国際空港で一晩過ごしていた。身体が疲れている。ブリクロンの姿を見付けるとほっとした。賢が言った。

「お久しぶりです。お元気でしたか？その後、変わったことはありませんか？」

「元気でした。あなたたちは？はじめに、ホテルに行きましょう。そこに、少し、打ち合わせです。沢山、話したいです」

賢と梓は周囲に神経を使った。空港の中で、自分たちに意識を向けている存在は見当たらない。EXITを出ても周辺に特に異常な雰囲気は感じられなかった。スーツケースをブリクロンの車に載せると、一行は早速ホテルに向かった。ホテルの周りは、砂塵のようなスモッグで息苦しさを感ずるほどだった。12時を少し回っていた。ホテルのセキュリティはしっかりしていた。敷地は鉄製の柵で囲われていて、ゲートには警

備員が2名居た。ホテル内に入るのに手荷物検査を受けなければならなかった。手荷物検査ゲートには5、6人の警備員とホテルマンが居た。異様な警戒態勢が敷かれているようだ。賢がブリクロンに聞いた。

「何かあったのですか？」

「爆発事件の後から、大きな警備、強化されます。まだ犯人グループ捕まってない。警察、探しています」

ブリクロンはまるで自分たちが部外者であるような話し方をした。賢はブリクロンの調子に合わせるように言った。

「爆発事件はどの辺りで起きたのですか？」

「それは、スナガチ（ソナガチ）の裏道。売春、合法化言ってる奴らいる。許せない。人身売買、今も続いている」

ゲートを通り抜けると、そこから先は格式高いホテルのイメージに変わった。まだ時間前だが、チェックインを認めてくれた。ふたりは一部屋しか予約しなかった。ダブルベッドが2つある大きな部屋だった。先ず部屋に入った。梓は賢と同じ部屋に宿泊することに、落ち着かない感覚を抱いていた。ベルボーイが荷物を運んで来て、それを荷物置き台に乗せると、賢がチップを渡し、ふたりは部屋を出た。グランドフロアの奥にある、周囲が黒地に灰色の筋模様の入った大理石で囲われた、高級感を漂わせるレストランでブリクロンが待っていた。ブリクロンは一番奥の隅のテーブルに、入り口に背を向けて座っていた。賢たちがブリクロンに向かい合う形で席に着くと、ウェイターが注文を聞きに来た。3人はチキンカレーを頼んだ。カレーとナン、漬け物が運ばれてくると、ブリクロンが言った。

「あれから、警察、必死に、犯人探したです。犯人、見つからなかった。今、警察はそれほど、必死じゃない。テロでないと思ったから。だけど、被害者必死になって、犯人探している。仕返しするため。だから、この町、危険」

「あなたは、ここに居ても大丈夫なのですか？」

「わたし、いつも、ここ、居ない。今日は特別。だけど、誰も分からない。わたしのこと、誰も知らない」

「僕たちも、調査を終えたら、直ぐにここを離れるつもりです」
「田辺さん、バウル調べる言った。バウルここも居るけど、田舎の方がいい。もっと、大勢居る」

「あなたのこと何と呼びましょうか？」

「ベンジャミン・ピルリーと呼んで」

「ぼくはケン、彼女はアズサと呼んでください。僕たちは夫婦として行動します。ところで、ベンジャミンさん、その被害者の犯人捜しについて、詳しく教えてくださいませんか？」

「はい、彼ら、日本人、ターゲットに絞っている。あなた狙われるかもしれない。被害者、どこかから、情報手に入れている。入国者のリストと比べている。あなた、初めの予定は、何日に、インドのどこ来る予定だった？」

梓が賢の方を見て軽く頷いてから応えた。

「わたくしたちは、スウェーデンから直接インドに来て、それからオーストラリアに行く予定でした。でも、スウェーデンで、狙われたのです。それで、一旦、アフリカに入って、それから、オーストラリアに行き、その後でインドに来ることにしました。インドはデリーとその周辺を調査する予定でしたが、日程を変更しました。だから、予定より10日ほどずれていると思います」

「納得したです。デリーで、約束どおり二人の日本人会いました。小塚さん、長谷部さんです。彼らは昨日デリー入りました。特にトラブルは無いです。デリーのホテル居ます。今日、ガンジー記念館行きました。1週間前、日本人若いカップルの旅行客、事故で死にました。わたし、心配しました。アズサさん、連絡くれた、安心しました。あれ、事故でないです。自動車爆発しました。オートリキシャ、運転手一緒死にました。あなたたち、狙われているかもしれない」

「ベンジャミンさん、あの後、ああいう組織はどうなりましたか？」

「インド政府、取り締まり強化です。でも、本当に取り組んでいるの、分かりません。あの辺り、ストリート・ガール減りました。以前のストリート、立っている女性姿見えません。人身売買組織、最近、動き無く

なつたです。爆発の売春宿、場所変わったようです。売春宿、経営者、犯人達追っています。かれら、犯人がまた攻撃して来る思っているようです」

「困い込みしてる、金持ちの人たちには、変化はありませんか？」

「それ、分からない。爆破された所、売りに出た。だけど、主、どうなつたか分からない」

賢は、自分たちの取つた過激な行動が、結果として、インドの売春組織の警戒心をあおり、彼らが脅迫観念に囚われるようになったことを知つた。このやり方が正しかつたのかどうか、クリシュナに聞いてみたいよな気がしてきた。梓が言つた。

「ベンジャミンさん、小塚さんと長谷部君は、わたくしたちが、コルカタに来ていることを知っていますか？」

「No, 知りません。アズサさん言つたとおり、2日後に着くと伝えた」

「ありがとうございます。彼らにはわたくしたちの行動について、伝えないでください。売春組織の者に覺られないために。このことはここにいる3人だけの秘密にしてください」

ブリクロンも承知しているようだった。賢が言つた。

「ベンジャミンさん、バウルについて、少し説明してくれますか？」

「わたし、そんなに詳しくないです。だけど、コルカタ、地下鉄でバウルよく唄っています。かれら、どの宗教でもないです。自由な人たち、欲もないです。わたし、バウル詩（うた）ひとつ知っています」

「*****」

ブリクロンはヒンズー語で小さな声で詩（うた）を口ずさんだ。

「日本語の意味、説明するよ。

おいで もしもあなた あたらしい人と 出会いたいなら
かれは 肩に掛ける袋だけで、この世のもの みんな手放した
かれは話す 永遠の母 カーリー 時の女神のこと ガンジス川に入
つてゆくときも

無知と不信は、こんなことばで打ち勝てる

カーリーとクリシュナはひとつ――

言葉は違っても その意味は みんな同じ
言葉の壁を越えて 限界を突き破った
アラームも、イエスも モーゼも、カーリーも 富者も、貧者も 賢者も、
愚者も すべては一つ 彼には全部 同じもの
自分の心に没頭で 彼はきちがい みたいだ
喜んで 世界を歓迎するため 彼は両手を広げる
生の川岸 現れた渡し舟 あらゆる人たち呼び寄せて
来なさい、もしもあなたが あたらしい人と 出会いたいなら」
賢と梓はあまり音を出さないように意識して、拍手をした。レストラン
には3組ほどのグループが食事をしていたが、賢たちのことは気に掛けて
いないようだった。賢が言った。

「ベンジャミンさん、訳した日本語の表現、上手ですね。いつも話して
いる言葉より、わかりやすい」

ブリクロンは苦笑いをして言った。

「本当は日本人の友達、教わったです。そのまま憶えた。わたし、あまり
意味分らない。どういうことですか？あの怒りの女神カーリーと、
理想的愛の神クリシュナ、同じという意味分かりません。ケンさん分か
りますか？」

「大体、こういう意味じゃないですかね。カーリーは時間の神、カーリー
自身に時間は無い。けれど時間を生み出し、そして、死を与える。人
はその時間に囚われて生きる。生まれることは、いずれ死ぬこと、生と
死は同じ。クリシュナは永遠の象徴、愛の象徴、人が与えられた運命を
生きるように説く。その愛と永遠は、カーリーの永遠普遍と変わらない。
カーリーの示す時間の中の生と死は、クリシュナの説く与えられた運命
と同じこと、表現は違うけど、同じことを言っている。生死と永遠の愛
は矛盾しているように見えるけど、本当は同じもの、人間が自分自身の
本質に立ち返る為の道案内であることに違いはない。自分自身の本質に
立ち返れば、すべてがそこから生み出されたことが分かる。彼らは、顕
現した時間も愛も、「すべて本質的に違いはない」と言っているのだと
思います」

ブリクロンは両腕を組んで首をかしげた。

「ケンさん、難しいですね。とても理解できません」

「頭で理解しようとしてはだめだと思いますよ。頭で考えるのではなくて、あなたの得意な、行動、体験で認識することだと思いますから。愛か、瞑想か……ですね」

ブリクロンがふたりに地下鉄に乗ってみようと言った。3人はナンを1枚ずつ、カレーは共用のトレイから半分ほど食べて、レストランを出た。ホテルを出て5分ほど雑踏の中を歩くと地下鉄の駅があった。ブリクロンが切符を3枚買った。地下に向かう階段を下りてゆくと、雑踏から離れた、静かな世界に入ったような気がした。日本の地下鉄のイメージと似ている。ブリクロンが言った。

「5両目か6両目の車両によくバウル 乗っています。どうしてそこに乗るのか分からないですが、大体そこに乗っています。今日もいればいいですけど」

2人はブリクロンの後に附いて、5両目の乗り口辺りで待っていた。10分ほど待つと、電車が入って来た。3人は乗り込んだ。地下鉄は比較的空いていて、3人並んだ席を確保できた。地上の雑踏が嘘のようである。しかし、バウルらしき人は居なかった。次の駅で、先に丸い壺のようなものが付いた、1本の弦の張ってある長い楽器を持って、一人の50歳ほどの男性が乗車してきた。彼は空席があるにもかかわらず、ドアの横に立った。垂直のポールに身体を預けると楽器を持ち上げて、弦を弾（はじ）いた。電車の騒音の中で、僅かに音が響いた。彼は唄い始めた。「バウルだ」賢と梓は喜んだ。詩（うた）は単調なトーンだが、身体に染み込むように響いてくる。

「あの楽器、エクターラ。昔の楽器。バウルあれ演奏する」

ブリクロンが賢に囁くように言った。バウルの男性はまるで天国にでもいるように、楽しそうに演奏をし、詩（うた）を唄った。賢と梓には意味は全く分からなかったが、歌声が心地よく耳に響いた。ブリクロンが「次で降りる」と言った。ふたりはブリクロンに附いてカーリーガートという駅で電車を降りた。

「カーリー寺院行きましょう。話し掛けてくる人、気をつけて」
細い道を奥に進んでゆくと子供達が寄って来た。ブリクロンが、子供達に一言二言話すと、子供達は近づかなくなった。ブリクロンは道沿いにある花屋に寄り、ハイビスカスの花を三本買った。それから、花屋の女主人に話しをした。ブリクロンがふたりに靴を脱ぐように言った。ふたりは靴下も脱いで、靴の中に押し込んだ。どうやらカーリー寺院には裸足で参拝しなくてはならないルールになっているようだ。ブリクロンは三人分の靴を花屋に預けると、素足で歩き始めた。梓は「靴を履かない方が心地よい」と思って、「それはアボリジニの人たちと過ごした所為だ」と思い、微笑んだ。カーリー寺院は礼拝に来た人たちで混雑していた。うさんくさい男性が近づいて来て、喜捨をするように言ったが、ブリクロンがヒンズー語で何か言うと、いそいそと引き下がった。ブリクロンが歩きながら説明した。

「この寺院、毎日山羊の生け贄捧げます。カーリー女神、このベンガル地方で人気ある。ここ中心街の南、ガンジス川の支流、フーグリー川の近くです。この近く、マザーテレサの「死を待つ人の家」あるよ。後で、見ましょう。この近く、売春宿もある。ソナガチとは別。ソナガチはもっと北、マーブル・パレスの方。この寺院、それほど大きくない。だけど、多くの信者たちいる。信者達も山羊の生け贄捧げる。異常な習慣。寺院それほど古くない。昔、デカン高原、タッグとか、サギーとか、殺人団居た。500年以上の間、百万人以上殺した。カーリーに捧げる為、間違ってる。デカン高原まだ、野蛮人いる。人殺す。人食べる。カーリーはカーラの変化。カーラは黒、そして時間の意味。シヴァはマハーカーラ、クリシュナも黒い色。カーラは最高の呼び名。カーリー神、殺戮の神？ケンさん、どう思う？」

「魔を殺し、邪を切り捨てる。人々は、血に飢えた神のように考える。それは甚だしい誤解だ。カーリーはこの3次元で死を与える神、つまり、誕生を与え、時間を与えて、人々に生きる糧を与える。慈悲の神だと思う。それもすべての人に。誰でも自分の本質を見れば、そこにカーリー神の姿が見える。そして、同時に愛の神、クリシュナの姿も見える」

「ケンさん、今度は少し、わかりました」

3人はカーリー神の像に花を手向けて参拝してから、マザーテレサの「死を待つ人の家」を外側から眺めた。思ったほど大きな建物ではなかった。それから3人は川に出て、人々が沐浴をするガートを見学した。賢は人々の沐浴する川には、ヴリンダバンで感じたような霊的な神聖さを感じなかった。

「カーリー神への誤った信仰で、邪念の方が純粹さを超えているのだろう。水がこれほど汚れていては、心を清くするのも難しい」

賢はコルカタの街に人々の捻れた意識の影響を感じていた。3人は、再び地下鉄に乗って、ホテルに戻った。既に夕日が傾いてきていた。

ブリクロンも一緒にホテルで食事をした。ブッフエ・スタイルの食事だった。ブリクロンはあまり牛肉を食べない方がいいと言った。基本的に良質な肉は無いと言った。元々賢も梓も肉はあまり好きな方ではなかった。ので、牛肉を避けてカレーを食べることにした。

「ケンさん、バウル、明日訪ねてみましょう。それからデリー向かいましょう」

「ベンジャミンさん、バウルの人たちの家は近いのですか？」

「彼ら、家無いです。野宿です。大勢いるところ行きます」

食事を済ますと、ブリクロンは別のホテルに戻って行った。賢と梓は部屋に戻った。梓の心臓の鼓動は激しくなっていた。オーストラリアで賢と共に生きた半年間は、意識の中だった。梓にとって、賢と共に過ごした日々が、どうしても本当にあったことのように感じられなかった。梓は、賢に先に入浴してほしいと言った。ホテルにはバスタブがあった。賢が言った。

「梓、一緒に入ろう。その方が楽しいだろう」

「あなた、恥ずかしいです」

「そうか、じゃ、先にはいるよ」

梓は恥ずかしいと言ったものの、賢の誘いを拒否するのは、らしくないと思った。賢がバスルームに消えると、梓も裸になってバスルームに入って行った。梓の乳房は小さい。身体は小柄でスタイルもそれほどよい

方ではない。しかし、恥ずかしそうにタオルで前を隠して、入って来た姿を見て、賢はそのかわいさに、思わず梓の手を引き寄せた。賢は、強い日差しで、芯までほてっている身体を冷やそうと、冷水のシャワーを浴びていた。その水が梓に掛かった。

「ひゃ、冷たい」

「あっ、ごめん」

賢は直ぐに湯に切り替えた。梓は冷たい水を受けたが、賢の身体が熱いのには驚いた。ふたりは抱き合って、口づけした。梓は目を閉じた。

「梓、僕たちは夫婦になったんだよな。みんなに何と言おうか？」

「あなたから説明してくださいね。でも、あなた、オーストラリアの生活は、本当のことだったのでしょうか？」

「本当のことだよ。時空間を切り替えていたから、この3次元での時間経過は1時間あまりだったけどね。梓、憶えているだろう。どう考えたって、半年間一緒に生活したとしか思えないだろう？」

「ええ。だから不思議なのです。もし、それが本当なら、わたくし、子供が出来ているかもしれないわ」

「もし、そうなら、この3次元の人が見れば、それこそマリア様と同じ処女懐胎と言うことになるな」

「そんなこと、あり得ないわね」

「いいや、あり得るよ。梓はまだ、意識の力を本当には認識できていないね。意識で何でも実現できることを」

「ええ、まだ確信が持てないわ」

「今日も、ありえるかな？」

「今日はないわ。それは確かよ」

翌朝、朝食を済まし、チェックアウトをしてロビーに居ると、ブリクロンが約束の時間より30分ほど遅れてやって来た。

「デリーで、日本人カップル怪我した。自動車事故。ニュース見ました。注意が必要です。今日はジョイデブの村、バウル会いに行く。OK？」
雑踏のコルカタを抜け、ガンジス川支流のオジョイ川に沿って北西に向

けておよそ3時間走ると、静かな村ジョイデブに着いた。その村は道に沿って、何百年も生きてきたようなバニヤンの木々が茂り、枝から大地に向けて降りている無数の地上根が絡み合って一つの太い幹を成している。ブリクロンは地図を頼りに木々の造る木陰のある、やっと通れるような細いでこぼこ道をゆっくり走り、小高い丘の上に車を停めた。ふたりはブリクロンに附いて、丘の上の草深い小道を歩いて行った。少しすると広場のような場所に出た。そこには10人ほどの様々な服装をした人たちが、1弦のエクターラやドターラ、コモックという弦楽器を演奏し、手製のように見えるカスタネットに似た楽器を打ち鳴らして、唄っている。子供が3人、壊れた金属製の洗面器と乾燥した瓢箪を叩いて、時々、バウルの歌声に合わせて、真似て唄っている。ブリクロンが立ち止まって、ふたりに言った。

「あの、真ん中のエクターラ持っている人、ガンガルダ・スワミです。みんな、グルの近くに居て、詩（うた）憶える。一緒に唄う。グル、構わない。ケンさん、グルと話する。OK？」

「ベンジャミンさん、僕は、ベンガル語は分からないから、通訳してもらえますか？詩（うた）も教えて欲しいし」

「大丈夫。通訳OK。だけど、ベンジャミンだめ、ブリクロンで話すね。嘘だめ、バウル何も隠さない。わたしたちも、隠さない。OK？」

「わかりました。ブリクロンさん」

ブリクロンがグルの近くに行くと、グルはにっこり笑って、手を振った。身体はがっしりしていて、目は大きく、彫りが深く、精悍な顔である。あごに髭を蓄えている。全員、唄うのを止めた。

「約束してあったのですか？」

梓がブリクロンに聞いた。

「No, 彼、わたしたち見れば、会いに来たのわかる。誰にもやさしい。だれでも歓迎だよ」

グルが言った。

「Hello! Welcome to Joydev village」（こんにちは。ようこそジョイデブの村に）

賢と、梓は喜んだ。グルが英語で話してくれたのだ。ブリクロンに続いて、賢と梓も挨拶をし、自己紹介をした。ブリクロンが言った。

「*****」(スワミ、今日は、パウルの心と詩(うた)を教えてくださいませんか?)

「*****」(いいですよ。わたしたちの心と、わたしたちの詩(うた)をいくつか教えましょう)

ブリクロンは賢と梓を促して、ガンガルダ・スワミの前の空いている草の上に座った。ブリクロンが、右掌を上に向けて賢に話すように促した。賢はグルの顔を見ながら英語で言った。

「*****」(スワミ、パウルの皆さんは、どうして詩(うた)を唄う人生を選ばれたのですか?)

直接的な質問をして、失礼かとも思ったが、一番聞きたいことだった。ガンガルダ・スワミがにっこり笑って、言った。

「*****」(あなたは、神はどこにおられると思いますか?)

いきなり切り返してきたグルに、賢もにっこり笑って応えた。

「*****」(自分の魂の奥底を見つめることができれば、神を意識できると思います)

ガンガルダ・スワミが言った。

「*****」(あなたには、何でも話せそうですね。わたしたちは、詩(うた)を唄うことによって、本当の自分の意識に立ち返ろうとしています。それがわたしたちの意図して行っていることです。それ以外のことは、大した意味ありません。わたしたちの意図しているのは2つのことです。ひとつは、いかなる既成の教義やしきたりにも囚われず、一切の法律などの規制も気にせず、勿論どんな宗教にも属さず、すべての日常的なことを捨てているということです。もうひとつは、たとえ悟りを得ようとしてでも、そのために修行したり、努力したりせず、ただ愛に生きていることです。それが悟りへの探求であったとしても欲望から来ることに変わりないです。絶対存在に対する、自分を捨てた献身は、クリシュナに対するゴピたちの愛の心です。それを、詩(うた)を通して実行しようとしているのです」

「*****」(そのようにしようと努力されているのですか?)

「*****」(いいえ、違います。努力はしません。無為に生きています。ただ、詩(うた)を唄うことで、自分の心に絡みついている、汚れや、不用なものをふるい落とししているのです。そう、ちょうど犬が、水に濡れると身体を揺すって水を振り払うでしょう。あんな感じです)

「*****」(唄っている詩(うた)の歌詞は、意味深いように思いますが、あのようなことを意識して唄っているのですか?)

「*****」(いいえ、あれは、言葉です。言葉はその意味より、その響きが大切なのです。言葉の意味を意識すると、そこに自我が現れて、どうしようかという気持ちが沸き上がってきます。思考が働いて、また、蔓草のように、自分の魂に絡みついてきます。それは、わたしたちの意図するところではないのです。そういう思考はすべて落とししてしまいたいのです)

「*****」(仏教などで謂う、無我の境地になるということですか?)

「*****」(そうですね、それに近いかもしれません。でも、意識せずにそうなるようにするのです。それは唄を通して、音を通してそうするのです。どうも、あまり説明ばかりしても、仕方ありません。こういう説明自体、意味が無い、いや、寧ろ邪魔なのです。ひとつ唄って差し上げます。ベンガル語ですから、意味は・・・あなた、ブリクロンさんですね、伝えてあげてくれますか?ベンガル語大丈夫ですか?」
ブリクロンが頷いた。グルはエクターラを持ち上げると、唄い始めた。

「*****」

賢と梓は拍手をした。ブリクロンがガンガルダ・スワミに時々確認しながら、その意味を英語で説明した。スワミが唄った詩(うた)は、愛の詩(うた)だった。

「*****」(恋する人のハートの言葉を理解できるのは、愛の味覚の食通だけ。その他のひとにはきっかけさえも得られない。ライムの美味は果芯に宿っているけれど、どんな達人でも、それに至る近道は分からない。蜜は蓮の花の中に隠れているが、蜂はそのことを知っている。馬糞に食らいつく何とか・・・コガネムシかな・・・コガネムシた

ち。蜜のことなど気にも留めない。服従こそが知識の秘密　　・・・・
こんな意味です)

賢が言った。

「最後の一節は意味深いですね」

スワミが応えた。

「*****」(自分自身を捨てて、すべて明け渡してしまうことで、
知ることができるという意味なのです。その知識の内、愛に関する知識
だけが、真の知識なのです。彼がコガネムシと言ったのは馬糞の中に
巣くっている虫です。巷の知識人のことを風刺しているのです。知識人
は既成の知識に頼って愛そうとする。でも、愛の核心には届かない。真
の愛を体現できない。最後の一節は、そういう価値のないものへの執着
を捨てて初めて、本当に必要な愛の知識が得られるという意味なのです。
もう一曲唄いましょう)

3人は拍手をした。スワミは唄い始めた。

「*****」

唄い終わると、3人の拍手の後、ブリクロンが意味を説明し始めた。

「*****」(愛欲の川には決して飛び込むな 君はその岸にたどり
着けない それは台風で激流となった岸のない川 形と形の家に行
くがよい 中にいるその人を 君が見たいと望んでいるのなら 彼の
道は生が死とともにあり 正気が狂気とともにある場所に続いている
君の目を閉じて 彼を捕まえよう 彼は知らぬ間に通りすぎてゆくか
ら)

梓が言った。

「*****」(抽象的で、難しいです。要旨はどういうことですか?)

スワミが応えた。

「*****」(情欲に捕らわれてはいけない。情欲に捕らわれると、
決して真の愛にはたどり着けない。情欲が生じたら、それを愛に高めな
さい。正しい目で、美しいもの、本当のものを見つめなさい。その内側
に存在している、神を認識したいのなら。それは生死を超えたもの、神
は真理と狂気の両面を持っていると知りなさい。あらゆるものに捕らわ

れないで、瞑想を通して、愛で神を把えなさい。神は意識的でないと、直ぐに通り過ぎてしまうので、把えることはできない。そう謂う意味ですよ)

梓は頷いた。神に出会いたいのなら、愛欲を超えて、真の愛にまで上り詰めなさいと言っているだと思った。スワミが言った。

「*****」(ここでは冬にお祭りがあるのです。3日間、村全体が祭りを楽しまます。この辺りのほとんどのバウルが集まります。隣の村から畦道を歩いてやって来る人々の手にするランプの灯りが連なって、人々の歓喜が伝わってきます。同じ生き方をしている者たちが集まった時の愛のエネルギーは非常に大きくて、すべてを受け入れます。あらゆる存在をたたえるバウルの愛。そんな愛に接し、人々の心は広く澄み渡り、悲しみ、不安、恐れ、欲、驕り、これらの感情を虚しく感じさせ、忘れ去ることができるひとときです。世俗的な現象として、このお祭りの間、様々なものを売る屋台が立ち並びます。200箇所以上の唄のステージができます。土を盛り、足で踏み固めただけのステージもあります。道という道は周りを見渡せないほどの人々で溢れ、細い道は動きが取れないほどです。しかし、会場の周辺に入ると、人々はわれわれバウルの作り出す雰囲気にも別世界を感じるはずで、薄暗い会場にはびっしりと観客が座って、歓喜の熱気の真只中で、唄い、踊るバウルの姿が、幻想的に見えるはずで、三日三晩にわたってあちこちの会場で唄い続けられるバウルの唄。「世俗」と「神聖」とが混沌とした祭りの中で数十万人の人々の求めるものに答えるのです。「自分の本質に立ち返りなさい。そこにすべての元がある。常に愛を体現しなさい。それが神聖への道です」と観客に呼び掛けるのです。わたしたちは不連続で、個々が自分だけの花を咲かせようと必死に生きる世界に住んでいます。あらゆる2元的な見方が、人々の心に自我と欲望を作り出し、競争を生み、争いを生じさせます。我々バウルは、すべての存在はその根源は一つと唄います。そして、この世に現れているあらゆるものをただ見つめ、そのどんなものにも属さないのです。バウルは愛を唄い続けます。生々流転を繰り返すように目に映るこの世界。しかし、これまで何も起こりはし

ませんでした。これから何も起こりはしないでしょう。そこにあるものがそこにあるだけなのです)

梓が言った。

「賢さん、あなたがいつも話していることですね。まさにそのものずばりという感じがします」

「そうだね。僕もそう感じていた。バウルの人たちの生き方は意識改革プロジェクトで施行しようとしていたモデルに近い。プロジェクトの問題点として、バウルの人たちの生き方が、なぜ全世界にまで拡大しないのか、そこに焦点を絞って考えた方がいいかもしれない」

3人はガンガルダ・スワミに別れを告げ、空港に向かった。途中道路沿いにある土産物店の食堂で、ナンとカレーを食べた。あまりきれいとは言えない店だったが、梓はホテルで食べたカレーの味よりおいしいと感じた。梓は売店でオレンジ色のサリーを、賢は派手な緑色のシャツを買った。それからしばらく走って、ダムダム空港と呼ばれるナタジ・スバシュ・チャンドラ・ポーズ空港の国内線ターミナルに着くと、ブリクロンは一旦3人の荷物を降ろしてから、レンタカーの返却に行った。傍らを通り過ぎる大勢のインド人がことごとく賢と梓に視線を投げ掛けてくる。ふたりは意識を集中し、警戒心を最大限に働かせた。しかし、幸いなことに何事もなかった。ブリクロンは戻って来ると、自分の荷物を手に取りながら言った。

「この次の空港、デリー警戒が必要です。だけど、ドメスティック（国内線）だから、少しは安心」

3人は午後6時10分発デリー行きの便に乗った。夜の8時15分に着く予定だ。梓が窓側、賢が通路側、通路を挟んでその隣にブリクロンが座った。飛行機が離陸すると賢が声を殺してブリクロンに言った。

「ベンジャミンさん、ホテルは空港から近いですか？」

「No, 30分掛かります。小塚さん、長谷部さんと同じホテルです」
梓が窓から外を眺めていて呟いた。

「バウルの人たち、今も唄っているのかしら？あの人達、夜はどこで寝るのかしら」

ブリクロンがそれを聞いていて、応えるように言った。

「どこかの家、泊めてもらえると、そこ泊まります。家無いとき、外で、野宿ね」

賢が言った。

「彼らは、生死を超えているのかな？本当にそこまで、自己放棄しているのかな？」

ブリクロンがまた応えた。

「No、彼らも、唄って、お金貰って、食事買って食べる。生きることは大切と思っている。ただ、それに執着しない」

「その通りですね。僕はね、彼らが、すべての行為を意識して生きているのだと思いました。食事の時も、食べ物に感謝して食べる。自分に与えられている肉体に、それを捧げる。そういう生き方をしているように思います。でも、彼らが本当の自分自身に到達しているかどうかは別問題だと思います。本当の自分自身に到達すると、この世界の人からは、彼らが異常に見える。人間のように思えない。もしそれが実現できていたら、彼らは火の中を通り抜け、水の上を歩き、空を飛ぶでしょう」梓が言った。

「あなたは、それが出来る—ということは、あなたは本当の自分自身に到達していて、この世界を写像であり、夢の世界であると、実際に把握しているのですね」

「僕も、やっとそのような認識ができるようになってきた。意識の次元を替えると、これまでの社会的な通念は適用できなくなる。君だって、ここに居て、あそこにも居る。今しかなくて、昨日も明日も無い。場所は特定できないし、時間も無い。全く何も変化するものがない。意識することで、3次元に真実の自分自身を写像として投影させて、それが創造という形を取る」

ブリクロンが言った。

「ケンさん、本当に、空 飛んだり、水の上歩いたり、できるの？すごいね。一度見てみたい」

「機会があったら、ご覧にいれましょう」

賢の説明は、まだ梓にもブリクロンにも真実として確信できるものではなかった。

デリー

飛行機はデリー国際空港の国内線ターミナルに着いた。賢と梓は再び周囲に対して意識を全開にした。ブリクロンもかなり緊張していた。飛行機を降りて到着ロビーに入ると、中国人旅行客の団体が同じ飛行機から降りて来た。3人の後から大きな声で話しながら歩いて来る。黄色い顔の人間は、この中国人観光客と賢たちの他には居なかった。賢はふと、中国人の中に混じって二人の陰湿な雰囲気のある男がいるのに気付いた。二人の男は賢たちのことを意識しているように見えた。ブリクロンも梓もそのことには気付かないようだった。通路を曲がったところで、二人は中国人の団体から外れた。一人が携帯電話を取り出した。賢は50メートル以上離れた二人の会話に意識を向けた。英語で話している。

「*****」（35歳前後の、日本人の男女と、連れの40歳ほどのインド人が同じ飛行機から降りた。跡をつけるか？……………分かった。ホテルの場所を確かめる）

男は電話を切った。賢は、バゲッジ・クレームに向かいながら、ブリクロンと梓に小声でさりげなく言った。

「我々を追跡してくる者達がいる。あの団体の後に附いて来ている青いシャツと茶色のシャツを着た二人だ。ベンジャミンさん、二人を撒きましよう」

ブリクロンは頷いて、自分の荷物を軽々と持ち上げると、駐車場に車を取りに行った。梓は公衆電話で小塚に電話した。小塚は喜んだ。ロビーで待っていると。スーツケースは直ぐに出てきた。チェックインの時、ドアサイドと注文を付けたのがよかった。賢は二人分のスーツケースを取ると、公衆電話から戻った梓と一緒に出口に向かった。二人の男達は、賢たちの素早い動きに、慌てたようだった。まだ荷物が出て来ないようで、茶色のシャツを着た男がバゲッジの排出口近くに残り、青いシャツの男が、知らぬふりを装って、賢たちの後を追って来た。外に

出ると、もう夜のとばりが降りていた。賢は迫り来る危険を感じた。ほどなくブリクロンが車をアプローチに寄せた。梓は直ぐに車の後部座席に乗り込んだ。ブリクロンと賢は急いで二人の荷物を積み込むと、車に飛び乗り、直ぐに発進した。追って来た男は慌てて、タクシーを呼んでいる。タクシーの運転手が悠長に動いているので、男は激しい剣幕で、運転手に注文を付けている。運転手は慌てたような動きになった。ブリクロンの運転する車はエアポートロードからハイウェイに向かった。

Delhi Express の工事関係の車が道路を横切り、渋滞を引き起こしていた。3台後に、青シャツの男の乗ったタクシーが附いて来ている。車は完全に止まってしまった。賢は後方からの鋭い視線を感じていた。5分ほどしてようやく前の車が動き出した。ブリクロンは後ろを意識して、前の車に続きスピードを上げて走り出し、少しして8号線に入った。8号線は流れていた。ブリクロンは前の車を次々に追い越し、街に入るころには後方のタクシーは見えなくなっていた。ブリクロンはハイウェイから降りると、街の中に入って行った。タクシーは10台以上後方を走っているようだった。やはり、ハイウェイから降りて来るのが見えた。ブリクロンはバイクやリキシャで混雑している道を左折、右折を繰り返して、もう一度ハイウェイに戻った。既に完全にタクシーの影は無くなっていた。

ホテルはそれほど立派なホテルではなかった。セキュリティもそれほど厳重ではない。エントランスを入ると、小塚と長谷部がにこにこしながら、歩み寄って来た。賢が言った。

「二人ともご苦労様。大変だっただろう」

「小塚くん、長谷部くん、ご苦労様、取材うまくいったの？」

梓もフォローした。長谷部がにこにこしながら言った。

「お疲れ様です。リーダー、部長、取材うまくいきました。後で報告します」

長谷部が心なしか堂々としてきているのを賢は感じた。3人は先ず、チェックインした。賢と梓は5階の隣り合った部屋を確保できた。ブリクロンは6階の部屋になった。小塚と長谷部は4階だと言った。チェック

インが済むと、ブリクロンが言った。

「このホテル、日本人観光客泊まらないホテル。その方が、安全と思います。インド人だけ、ここ、抜け道。奴ら、ここまで手、廻さない」
賢はなるほどと思ったが、外部から自由に入って来られることが懸念材料だった。夜も遅いので、5人は直ぐにホテルのレストランに集合した。

「先ず、君たちの話を聞かせてもらえるかな？」

賢が口火を切った。長谷部が小塚の方を少し伺ってから言った。

「コペンハーゲンもノルウェーも国民の生活基盤の確保という、政府の方針に基づいた取り組みで、成功を収めた国だということが分かりました。いずれの国もスウェーデンほどではないですが、人々が安心して生活してゆける国の形態を作り上げています。結果的に国民総生産も向上して、経済も安定してきたようです。詳細はレポートにまとめますが、そこには我々が取り組んでいる、物質中心の生き方から。精神重視の生き方への変革というような概念は無いと感じました。でも、「物質的な安定が、精神性にも影響を与えているという事例がかなり見られる」と、デンマークやノルウェーの人は言っていました。僕たちもそれは事実だと感じました」

ここから小塚に変わった。

「それから、インドに来てからですが、ガンジーについて詳しく調べました。ここにはガンジー記念館があります。大勢の人で賑わっていました。インドの無抵抗主義の指導者、インドを独立に導いた神のような存在として、ヒンズー教の聖人の中にも祀り上げられ、崇められています。ガンジーについては、インドの人たちの意見も聞いてみました。でも、必ずしも、崇拜されてばかりいるわけではなさそうです。その反対の見方をしている人もいるようです。様々な意見をまとめていますので、後ほどレポートで報告します」

「本当にご苦労様。いい経験をしただろう。自分たちだけで行動すると、本当の世界の姿を肌で感じるができる。そういう意味でも、君たちの自信になったんじゃないかな」

賢も、梓も満足だった。遠慮しているのか、小塚も長谷部も賢と梓の調

査の結果については尋ねなかった。二人の部下の、人としての成長を感じて、梓は満足したようだった。梓が言った。

「二人とも、本当は大変だったんでしょう？」

「はい、でもコペンハーゲンとオスロでは宗地さんがすべてお膳立てしてくださいましたから、本当に助かりました。僕たちだけでは、何もできなかったと思います」

「ところで、君たち、この10日、何か危険な目には遭わなかったか？」小塚と長谷部が顔を見合わせた。小塚が言った。

「僕たち二人には、特に危険はありませんでしたが、デリーに着いたとき、入国審査を通り抜け、荷物を取ってEXITを出ると、3グループほどの日本人の旅行客が居たのですが、4、5人のインド人の男達が、日本人旅行客のところを廻って、何か質問して歩いていました。一番大きなグループ、大体20人ほど居たでしょうか、そのグループの人たちに質問をし終えた後、その近くで、個人ツアーを誘っている男に話しかけられていた一組の30歳前後のカップル、多分二人でここに来たように見えてましたが、その二人に何か聞いていましたが、そのうち、いやがる二人を外の方に無理矢理連れて行こうとしました。それを見ていた大きいツアーのガイドの男二人が、近づいて行って、その男達に何か言ったようですが、男達にいきなり突き飛ばされてしまい、床に倒れ込んでしまいました。他の旅行客は、関わりにならないように、そこから遠ざかって、知らんぷりをしているようでした。僕らも、危険を感じて、勧誘に来たタクシーをつかまえて、急いでホテルに向かいました。昨日の午後、ニュースで日本人旅行客のカップルが、事故に遭ったというニュースを聞きました。連れ去られた人たちだったのかどうか分かりません」

「そんなことがあったのですか？でも、君たち二人が無事で何よりです」真剣な面持ちになっていたブリクロンが言った。

「早く、ここ離れるのいいです。明日の計画何ですか？」

「インドの聖人と言われる人を訪ねて……止めましょう。明日、できるだけ早く北京に向けて発ちましょう」

賢は、ここでの調査は危険だと見た。梓も同様に感じていた。

「ところで、二人は、日本とコンタクトを取っている？」

「はい、勿論、報告は欠かしていません」

「インドについてはいつ報告した？」

「オスロを発つときに予定を説明して、昨夜は、ガンジーの調査結果を簡単に報告しました。そのときにリーダーと部長のことを聞かれました。連絡が途絶えていると言っていました。本社の人たちは心配していました」

「そう、連絡を取るのを止めたんだ。ストックホルムで、我々を追跡するように、危険なことが起きていただろう。君たちと別れてからも、空港の近くで爆破事故があったんだ。それも、我々が通り過ぎた直ぐ後で、道路が爆破された。だから、安全の為に行動計画を誰にも話さないことにしたんだ。たとえ、本社に対してもね。情報網の張り巡らされている時代だから、どこで、リークするか分からないからね」

賢の言葉に対して長谷部が言った。

「申し訳ありません。インドでリーダーと合流する予定だと話したのは、まずかったですでしょうか？」

「いや、心配しなくてもいい。勿論用心は必要だけどね。まだ狙われていると決まったわけじゃないから。ただ、今後はリスク回避のため、相談してから報告することにしよう」

二人は頷いた。4人は翌日、午前10時の直行便で北京に向けて発つことに決めた。幸い土曜日から火曜日までは直行便が運行されていた。午後8時には北京に着くはずだ。部屋に戻ると、梓は先ず便の変更をしてから賢の部屋に来た。日本を出てから20日以上経過している。

「今度の出張は、プロジェクトにも、いろいろな人たちにも影響を与える結果になりますね。社長は激怒するでしょうね」

「うん、覚悟しているよ。止めることができなかったとはいえ、亜希子を残してきた責任は重大だ。言い訳は立たないだろう」

「あなたがどんなことになっても、わたくしはあなたについてゆきます」

「梓、会社は、そんなことは許さないだろう。君には責任はない」

「そんなことどうでもいいの。あなたと一緒に生きてゆきたいの。もう、

離れて生きたくないわ」

「梓、君も知っているとおり、僕は祐子や亜希子と約束を交わしているんだよ。だから、君と共に生きることは、この社会常識には矛盾することになるんだ。それでもいいのか？」

「本当は、いやです。でも、祐子さんも亜希子さんもルワンダに住むことになってしまったでしょう。だから、わたくしはあなたと生きたい。オーストラリアの半年間、あなたと共に過ごして、わたくしは決めました。あなたと一生共に生きようって」

「社会の法律や、規範、慣習に捕らわれない生き方をすることになるけど、いいんだね」

梓は頷いた。賢は梓を抱き寄せた。梓は目を閉じた。

ふたりは1時間ほど抱き合っていた。賢の腕の中で梓が言った。

「あなた、唯物論の国、中国で何をするつもりですか？」

「タオだよ。日本神道にも影響を与えたと謂われているけど、その神髄を知りたい。できたら、白霧館に行って、道士の修行の様子を伺って、その後、可能だったら遠隔移動で聖山5岳の一つ東岳・泰山の道教寺院を訪れてみたい。昔から蓬萊3神山の方角にあると謂われて、中国人の信仰的になっている泰山だから、何らかのインスピレーションを受けるかもしれない」

「あなた、わたくしも連れて行ってくださいね」

「勿論だよ、いつも梓は一緒さ」

梓は、にっこりと笑った。笑窪が嬉しそうな様子を一層強めている。

「小塚君と長谷部君はどうでしょう？」

「彼らには、気功師の所を訪れて調査して貰おう。唯物主義の国で国家資格として認めている気功だから、政府が具体的な効果を認めているんだと思う。物質偏重から、どうして、目に見えない「気」というものを認めていったのか、その経緯にも興味がある。あの文化大革命時代に4人組の元で紅衛兵が道教を弾圧して、道教の指導者や道士を捕らえ、神像を破壊していったが、4人組を打倒した今の政府になってから、直ぐ

に破壊された施設が復興された。唯物史観の中で、何が変わってきたのかということだ。唯物化してしまった日本人の意識改革に何か、必要な要素を見いだすことができるかも知れない」

「唯物論の国で意識改革のヒントを探すというのも、逆説的で、面白いですね」

「とにかく、僕たちは、道教の宇宙観、陰陽の考え方、精神と肉体は一つという捉え方に、触れてみよう」

梓は自分の部屋に戻って行った。時計は12時を回っていた。賢は意識を祐子に向けた。チャンネルが繋がらない、亜希子に向けてみた。亜希子の声が聞こえてくる。亜希子は康介と一緒に居るようだった。どうやらフルマの話しをしているようだ。少しして、亜希子は康介と別れた。それがどこかは分からないが、やがて亜希子は自分の部屋にいて、賢に意識を向けてきたのが分かった。

「あなた、どうしていますか？わたくしは、お姉様の近くで、人々を救済する計画を立てています。わたくしは、エチオピアに行くことにしました。あそこには沢山の病人が居ます。香川さんに頼んで、医薬品を手に入れようとしています。医薬品が手に入って、ビザが下りて、わたくしの予防接種が済んだら、出掛けるつもりです。初めは飛行機で行きます。向こうの状態が理解できたら、それからはテレポーションを使って行くつもりです。あなたと梓さんは、飛行機で発たれてからどうなさいましたか？あなた、梓さんとあまり、仲良くしないでくださいね。わたくし悲しくなってしまうから」

「亜希子、元気か？食事はちゃんとしているか？そのほか生活に必要なものはちゃんと手に入るか？普段、何をしています？」

「あなた、わたくしのことを忘れないで居てくださったのですね。応答いただけるなんて、信じられません。うれしいです。昨日も、一昨日も、その前の日も、あなたを呼んでみたのですよ。でも、繋がりませんでした」

「ごめん、生活は大丈夫か？さっき、鹿島さんと一緒に居ただろう？」

「はい。鹿島さん、わたくしにとっても親切にしてくださいます。鹿島さ

んと同じアパートで安心しています。今のところ、特に不自由に感じることはありません。ただ、これからは鹿島さんにばかり頼っては居られませんので、早く自分で行動できるようになりたいと思っています。あなたは、お元気ですか？あれから、危ないことはありませんでしたか？」

「インドのデリーまでは大丈夫だったけど、デリーで怪しい男に後をつけられたので、明日の朝、中国に向かって飛び立つつもりなんだ」

「気を付けてくださいね。わたくし、心配です」

「ありがとう。ところで祐子はどうしている？」

「お姉様は、今とってもお忙しいようで、わたくしも、あれからお会いできていません。どうやら、大きなお仕事をされるようです。内容はお話しだけできないのですが。でも、本当のお姉様の近くに居るだけで、胸が躍ります。わたくしたちがふたりきりの孤児だったと分かりましたので、もう、絶対にお姉様から離れません」

「だけど、くれぐれも危険なことはするなよ。必ずまた、会いに行くから」

「わかりました。気を付けます」

「じゃ、また、呼びかけるから、いつも意識は君たちの近くに居るからね。おやすみ」

「おやすみなさい」

翌朝、梓は昨日買ったサリーを身につけ、薄い色のサングラスを掛けていた。顔や手も陽に焼け、将にインド人だった。賢も昨日買ったグリーンのシャツを着て、サングラスを掛けている。朝食の席に着いていると、小塚と長谷部がレストランに入って来たが、賢たちに全く気付かない。離れた席に二人で座って、食事を始めた。梓が小声で言った。

「わたくしたち、インド人に見えるのかしら？」

「案外、見えるかも知れないな。口をきかなければね。ちょっと放っておいてみよう」

ふたりは小塚達が何時気付くか、おもしろがって観ていた。彼らはとうとう食事が終わるまで気付かなかった。食事を済ますと、辺りをきょろきょろ見回してレストランから出て行こうとした。長谷部がこちらに視

線を向けたとき、賢が右手を挙げた。二人はにこにこ笑いながら、賢たちの席にやってきた。

「分かりませんでした。どうしたんですかその格好？」

「どう、似合うかしら？」

「部長、もうインド人そのものですよ」

「まだ時間があるから、一緒にコーヒーでも飲もう」

「いま、リーダー達を探そうと思って、早めに席を立ったんです。リーダーも部長も人が悪いですよ」

4人は暫くの間、中国での調査について話し合った。

4人がチェックアウトをしてロビーに居ると、ブリクロンが緊張した顔つきでやって来た。梓の服装を観ても、にこりともしなかった。

「奴ら、わたしに感づいた。後つけられた。だから、奴ら撒いた。レンタカー公園の駐車場に置いた。タクシーで来た。直ぐ出ましょう」

賢は意識を集中してみた。危険は感じない。賢と梓が先ずタクシーにスーツケースを積み込むと、直ぐに小塚達がトランクに隙間を作って荷物を積み込もうとしたが、どうしても載り切らなかった。ブリクロンはうっかりしていたと言って、舌打ちをした。仕方なく、先ず危険度の高い賢と梓が先に出ることにした。ブリクロンはもう1台タクシーを呼んで、後からふたりを追うことにした。賢は梓と共にタクシーに乗り込むと、運転手に言った。

「Delhi International Airport please.」(デリー国際空港お願いします)
運転手は振り向いて言った。

「Yes, sir. Are you Japanese? How was Delhi?」(はい、ご主人様。あなた方は日本人ですか？デリーはどうでした？)

「Yes, we are. Delhi was the interesting city for us. It's moving very quickly, isn't it.」(ええそうです。デリーは面白い街でした。とても早く動いていますね。)

「Yes, it is, sir.」(はい、そうです、旦那様)

運転手は直ぐに出発した。賢の意識に、運転手の暗い心の動きが映った。案の定、予想していた方向と違う方向に向かい始めた。賢はポケットか

ら、1000ルピー取り出すと、運転手に渡しながら言った。

「We have to arrive the airport as soon as possible. Here, you are.」

(我々は出来るだけ早く空港に着かなくてはならない。はい、これ)

「Ok, I understand, sir. I will change the way to the airport.」

(わかりました、ご主人様。空港への道を変えます)

運転手は1000ルピーを受け取ると、急に方向の転換を図った。明らかに違う方向を向いていたのだった。8号線に乗ると運転手はスピードをアップした。何台もの車を抜き去り、スムーズに空港に着いた。運転手はタクシー・ストップに車を止めると、ふたりの荷物を降ろし、カートを持って来て、それを賢に渡し、

「Thank you, sir. Please take care.」(ありがとうございます、ご主人様、お気をつけて)

と言うと、急いでタクシーに乗り込み、出発ターミナルから出口に向かって走り去った。ふたりは急いで空港ビルに入り、エチオピア航空のチェックイン・カウンターに向かった。梓が言った。

「危なかったですね」

「梓も分かっていたのか？」

「ええ、方向が違うと思いました。あなたはどのように分かったの？」

「方向がおかしいと感じたときに、同時に、あの運転手の意識が暗くなって来たのも感じたんだ。多分、奴らタクシーの運転手にも手を廻しているんだろう。だけど、運転手だって奴らに荷担するのはリスクが大きいから、1000ルピーなら、こっちの言うことを聞くと思ったんだ」

「少なすぎれば、無視されるかもしれないし、多すぎたら、自分たちが追われていると宣言しているようなものだし、どちらもまずかったですよね。ちょうどいい金額だったと思います」

「少し多すぎるとも思ったけど、惹きつけるにはあの金額がいいと感じた」

そのとき、ブリクロンが小塚達を連れて入り口を入れて来た。

「無事で、安心でした。よかったです。直ぐにチェックインです」

チェックイン・カウンターは空いていた。賢が4人分まとめてチェック

インした。ブリクロンが一息吐いたように言った。

「梓さん、似合っている。美しい」

梓はブリクロンのお世辞に思わず微笑んだ。賢もチェックインをしながら、ブリクロンを観て頷いた。

出国前の手荷物検査ゲートの手前で、4人はブリクロンと分かれた。

「賢さん、皆さん、気を付けて。暫く、インド来ないのいい思います。今、危険だから」

4人は深々と頭を下げた。出国手続きはスムーズに済んだ。賢と梓はやっと緊迫状態から解放された。小塚と長谷部は土産物店を廻ると言ってデューティフリー・ショップ（免税店）の方に向かって行った。賢と梓は直ぐに搭乗ゲート前の待合室まで行った。日本人の姿は無い。賢はしばし瞑想をした。梓はノートを取り出して、出張の日誌をまとめることにした。搭乗までにまだ1時間近くあった。暫くすると、賢の脳裏に大勢の人たちの姿が現れた。その中に、陰湿な雰囲気を持った男が居るのが分かった。賢は目を開いた。中国人の観光客が大きな声で話しながら賢たちの居るゲートに向かって通路を歩いて来た。その一番後ろの男に、荒んだ雰囲気を感じた。賢は意識を集中してみた。明らかにデリーに着いたとき、後を追って来た男だった。賢は梓に小声で言った。

「梓、危ない男が一人来た。これからは英語で話す。日本語はまずい。」

「Azusa, go and find them. Tell them never to talk to us.」(梓、行って、小塚達を見つけて、決して我々に話し掛けるなどと言ってくれ)

梓は頷いて立ち上がると、窓際の椅子の間を歩き、中国人達の背後から通路に出た。暫くすると梓は戻って来た。

「Everything is OK, darling.」(あなた、すべてOKよ)

「Thanks, my sweet.」(ありがとう、おまえ)

中国人達は賢たちの2列窓際寄りの席を確保して、また大きな声で何か話し始めた。陰湿な雰囲気の男は、時々辺りをきょろきょろ見回していたが、やがてスタンドバーの方に向かって歩いて行った。陰湿な雰囲気の男が居なくなると同時に、小塚と長谷部が土産袋を手に提げて戻って来た。二人は賢たちの居ることを意識しているようだったが、少し離れ

た場所に並んで座った。賢たちに二人の話し声が聞こえてくる。

「おい、長谷部そんな本、まずいんじゃないか？」

「そんなんじゃない。カーマ・スートラは愛の教典という意味だよ。おまえ、真面目すぎだよ。おまえも、何か本買っただろ？」

「おれは、History of India (インドの歴史) って本だよ。おまえとは違うからな。半分は英語の勉強の為さ」

「おれだって、半分は勉強の為さ。だけど、楽しみながら読まなくちゃ、英語も身に付かないからな。後で、見せてやるよ」

「いいよ、そんなの、見たくもない」

他愛のない会話を聞いていると、陰湿な雰囲気 of 中国人が手にビールの紙コップを持って戻って来た。中国人は小塚の隣に座った。小塚が中国人に話しかけた。

「日本人ですか？」

「No, I'm Chinese. How about you? Japanese?」(いいえ、わたくしは中国人です。あなたがたは？日本人？)

「Yes, We are.」(ええ、そうです)

「Sightseeing or Business?」(観光それともビジネス？)

長谷部が会話に割り込んで言った。

「Sightseeing.」(観光です)

小塚は長谷部の機転に気付かなかった。

「No, business trip.」(いや、ビジネス出張です)

中国人は怪訝な顔をして、ビールを飲んだ。長谷部は、いきなり小塚の持っている袋を取り上げ、それを広げてカーマ・スートラを取り出した。

「He is kidding. Look this book. Do you like it?」(彼は冗談を言っている。この本を見て。あなた、好きですか？)

その表紙を見て中国人はビールをもう一口ぐっと飲むと言った。

「Oh, I love this book. I have three Kama Sutra books in my house.」

(ああ、この本は大好きです。わたくしは家にカーマ・スートラの本を3冊持っています)

小塚がむきになってカーマ・スートラを取り返そうとした。長谷部は本

を上を持ち上げて、日本語で「ばーか」と笑いながら言った。陰湿な雰囲気の中の中国人も笑った。小塚と梓の目が合った。小塚は「はっ」とした。中国人が最後の一口を飲み干してから言った。

「Are you friends? No other tour people?」（あなた方は友達ですか？ほかにツアーの人は居ないのですか？）

小塚が応えた。長谷部はヒヤッとして、目をむいて小塚を見た。

「Yes we are friends. We two are traveling together sometimes.」（ええ、我々は友達です。我々二人は時々一緒に旅行します）

「That's sounds good. Ok now, I'll back to fellows. See you again.」（それはいい。さて、仲間の所に戻るよ。じゃまた）

「Goodbye. See you again.」（さよなら、また会いましょう）

陰湿な雰囲気の中の中国人が仲間の所に戻ってゆくと、長谷部が小塚の頭を軽くこづいた。小塚はこづかれて苦笑いをし、ちょっと舌を出した。少しして搭乗が開始された。4人の席は前から5番目の同列の席だった。窓際に長谷部が座り、通路側に小塚が座った。その隣に通路を挟んで梓が座った。その横が賢の席で、通路を挟んで、インド人の女性が二人座っている。ビジネスクラスの席だったので、優先的に搭乗できた。暫くして、中国人のツアー客がぞろぞろと奥に向かって通って行った。先ほどの陰湿な雰囲気の中の中国人が通り過ぎるとき、長谷部と小塚に軽く手を振った。二人もそれに応えた。中国人は賢と梓には気が付かないようだった。やがて、サービスのシャンパンが配られた。ビジネスクラスは待遇が違う。特に精神的な圧迫のあったときはビジネスクラスの席に座ると、身も心も安まることを梓は知ってしまった。これまで、梓の周りには海外出張を海外旅行のように考えている上司が多かった。梓は何度となく、エコノミークラスで出張した。酷いときは経費節減の名目で、ツアーの仲間に入って出張したこともあった。時差の中での打ち合わせ、そして、移動。海外出張が如何に厳しい任務であるか、理解できていない者が多い。中には、ろくに仕事をせずに、視察と称して、あちこち見学だけして帰る者達が居たことも事実だ。そういう者達を観て判断して欲しくないと思った。内心、もう、仕事でのエコノミークラスは厭だと

思った。狭い場所でレポートも書けない。初めての海外出張でビジネスクラスを使える小塚達は恵まれていると思った。梓が小塚に英語で言った。

「Did you understand what was wrong?」(何がいけなかったか分かった?)

「I'm so sorry. I have forgotten this is business trip. I didn't think the most serious situation.」(すみませんでした。僕はこれが出張だということを忘れていました。最悪の状況を考えませんでした)

「Ok, do not talk to us anymore in this aircraft.」(いいわ、もう、この飛行機の中では我々に話し掛けないでね)

梓はレポート用紙を取り出すと、先ほどの続きを書き始めた。賢は瞑目した。賢は祐子に意識を繋げようとした。しかし、うまくいかなかった。亜希子にも繋がらない。賢は瞑目を続けた。着陸の一時間ほど前になって賢は梓に声を掛けられた。

「Darling, it's dinner time.」(あなた、夕食の時間よ)

スチュワーデスが直ぐに夕食のトレイを持って来た。前菜とスープが附いている。小塚と長谷部はワインを飲みながら美味しそうに食べている。食事をしていると、頭の中に原の声が聞こえてきた。賢は、原がオーラビジョン・システムで呼び出しを掛けてきたのだと思った。

「賢さん、容易ならない事態になりました。今日の昼、何者かによって、工場が攻撃されたのです。幸い、建物の外壁が損傷を受けただけで済みました。僕は、工場長に、緊急対応で工場の塀をあと二メートル高くするように命じました。明日から工事を始めます。つい一週間前にも、工場の敷地に、手榴弾のようなものが投げ込まれました。警察が必死になって捜査してくれています。まだ、犯人の見当も附いていません。賢さん、そちらは如何ですか？」

賢は頭の中で原に返事をした。

「原さん、こちらは、どうやら売春宿の関係者に狙われているようです。報復か、あるいは我々の次の行動を阻止しようとしているようです。でも、何とか最後の訪問国中国まで辿り着けそうです。あと一時間足らず

で着きます。愛子は元気ですか？」

「とても元気ですよ。相変わらず、空中に浮こうとしているようですが、なかなかうまくいかないみたいです。ぼくは、あまりそのことにこだわらない方がいいと、忠告しています。毎日一緒に練習していますよ」

「オーラビジョンはもう、こうして、生きている人との会話もできるようになったんですか？」

「まだ、実験段階です。生産の方が忙しくて、間に合わないほどなのです。合間を見て実験しています。うまく話せているようですね」

「全く問題ないですね。あの、ボールを使って話しているのと同じ感覚だよ。そう、それから、亜希子はルワンダに残ったんです。このことは、まだ誰にも言わないでほしい。原さんと、愛子だけにしておいてください」

「やはり、そうですか。分かりました。愛子さん以外の人には話しません。賢さん、いつ戻りますか？」

「多分、三日後だと思います。帰国計画も、誰にも話さないでほしいんです。どうも、日本を経由して情報がこちらに流れているような気がしてね。だから、本社にも報告していないんです。帰国してから、弁解が大変だけどね」

「分かりました。気を付けてくださいね」

意識の仕組みが解明されてきつつあることに賢は興奮した。本来人間の持っている機能をこのような機械的な仕組みによって、思い出させる試みができるということは、やはり現在がそういう段階に至っていることを意味するのだと思った。梓が、二人分のイミグレーション・カード(入国審査用紙)に記入しながら、言った。

「Darling, what are you thinking now?」(あなた、今、何考えているの?)

「Nothing. I was just talking with Mr.Hara.」(何にも。ただ原さんと話していたんだ)

「What! Did he complete the design of new machine?」(何ですって! 彼は新しい機械の設計を完成させたのですね)

「Yes, he did. He tested it with me by telepathic talk. And there seemed to be some trouble over our factory.」（うん。彼は僕とテレパシーの会話でテストしたんだ。それに、工場で問題があったようだ）

「What happened in Japan?」（日本で何があったの？）

「I'll explain you it later.」（後で話すよ）

梓は心配そうだったが、賢が周囲を気にしているのを感じた。

北京

飛行機が空港に着陸すると、賢たちは直ぐに飛行機を降り、急いで入国審査ゲートに向かった。陰湿な雰囲気の中の中国人と顔を合わせたくなかった。入国審査には時間が掛かった。指紋や虹彩の確認までされたが、無事入国が認められた。バゲッジ・クレームでは、できるだけ中国人のツアーの団体から離れようと思った。やがて大声で話しをする一団が姿を現した。彼らは中国人の入国ゲートを通過したので、そこで追いつかれてしまったようだ。インド人は全部で30人ほど居た。賢と梓はインド人の多く居る場所を選んでその中に紛れ込もうとした。梓は荷物が出て来るまでの間にドルを元に替えようと、Exchange（両替）に向かった。長谷部と小塚も両替しにやって来た。梓は、小塚と長谷部に中国人旅行者が居なくなるまで、自分たちから離れている様に言った。梓が戻って来ると、賢が梓に囁いた。

「あの男が電話をしている。誰かと連絡を取っているようだ。あの男の動静から目を離さない方がいい」

陰湿な雰囲気の中の男は終に、賢と梓の存在に気付かなかった。EXITを出たところに鷺山というガイドの男が迎えに来ていた。賢は梓の手際の良さに脱帽だった。梓はコルカタに到着した日から日本で予約した鷺山とコンタクトを取っていた。小塚と長谷部は賢たちに距離を置いて、少し遅れてEXITから出て来た。二人は賢と梓が鷺山と話しているのに気付いたようだが、まだ10メートルほど離れたところで様子を伺っていた。少しして、中国人の団体がEXITから出て来始めた。陰湿な雰囲気

気の男も姿を現した。男は小塚と長谷部の姿を見ると、手を挙げた。小塚が手を振って応えた。団体のメンバーは自由解散をしているようだった。男が出口から歩いて来ると、黒っぽいシャツを着た若くて大柄な3人の男達が、陰湿な雰囲気のある男に近づいて頭を下げた。男は若い男達を待たせておいて、小塚達の近くに来た。

「Where are you going to stay in Beijing?」（北京ではどこに滞在するのだね？）

「We didn't decide the hotel yet.」（まだ、ホテルは決めてないです）
男はにやにやしなながら、小塚の耳元で囁くように言った。

「Why don't you stay our hotel. You can enjoy with our pretty girls. Or I can also introduce some beautiful girls.」（うちのホテルに泊りませんか？きれいな娘と楽しめますよ。それか、美しい娘達を紹介することもできます）

小塚はどう応えたらよいか判断に窮した。長谷部も、まずい状況になったと思ったが、不意にアイデアがひらめいた。

「We have reservation of the city tour. We have to wait for the agent of tour guide. He has a personal relation to the police. I'm sorry, we cannot follow you.」（我々は市内ツアーの予約をしています。我々はツアーガイドを待たなければなりません。かれは個人的に警察とつながりがあります。申し訳ありませんが、あなたについて行くわけにはいきません）

男の顔色が変わった。

「Ok, see you next time.」（分かった、また会おう）

そう言うと、男は若い3人の男達の方に向かって歩いて行き、連れ立って空港ビルから出て行った。その様子を伺っていた賢は、少し間をおいてから小塚達の方に近づいた。

「どうやら、うまく躲したようだな。あの手の男には、あまり関わらないようにしなくてはな。今度はうまくいったけど、ああいう男達は執拗だからな」

「リーダー、身に染みしました。一時はどうなるかと思いました」

小塚が言った。賢は時間を稼ぐために、5分ほど鷺山とツアーの相談をした。鷺山は賢への説明を終えると、梓のスーツケースを押して歩き始めた。賢は鷺山の横に並んで歩き、二人の男達はその後ろを、自分のスーツケースを押して附いて行った。鷺山が空港ビルの外に出ようとしたとき、賢は先ほどの男達がまだ、停めてあるベンツの前で話しをしているのに気付いた。賢は鷺山を止めて小声で言った。

「ちょっとまずい雰囲気ですから、先ず、小塚さんと長谷部くんを乗せて一旦空港のアプローチから出てください。そして15分後にもう一度戻って来てください。事情は後で説明します。僕らはここで待っています。彼らは跡を追跡（つけ）て来るかもしれませんから、撒いてください」

鷺山は事情を飲み込めないようだったが、小塚と長谷部のスーツケースをライトバンに載せ、ふたりが乗り込むと直ぐに車を発進させた。やはり、4人の男達が急いでベンツに乗り込み、鷺山の車の後を追うように出て行った。梓が言った。

「あなた、今のはどういう意味ですか？」

「多分、奴らは売春組織の者達だろう。丁度いい鴨を捕まえたと思っ
ているのだろう。鷺山さんが、彼らをうまく撒いてくれるといいんだけど」

「小塚君と長谷部君のことですか？」

「うん、さっき執拗に誘っていただろう。二人はあの場をうまく逃れた
ようだけど、彼らはしつこいからね。鷺山さんが彼らを撒いてくれれば、
安心して視察ができるからね」

賢と梓は空港ビルの中に入り、目立たないように、柱の陰に立って外を
伺っていた。やがて鷺山の車がアプローチの入り口方向から戻って来た。
賢と梓はスーツケースを押して外に出た。鷺山が車から降りて来て言っ
た。

「奴らは誰ですか？ただ、追っ払えばよかったんじゃないんですか？」
賢が言った。

「あの年長の男は、インドで我々の後を追跡していた男なんです。デリー
の空港で偶然、また鉢合わせてしまったんです。我々が服装を替えてカ

モフラージュしていたので、相手は気付かなかったけど、たまたま小塚君と長谷部君に近づこうとしてきたんです。ちょっと複雑な感じだけど、幸いまだ、僕と田辺さんには気付いていないから、先に二人に車に乗って貰って、奴らを撒いてもらったんです。これから、安心してガイドしていただこうと思ったんです。お手数をおかけして、申し訳ありませんでした。助かりました」

「一旦空港外に出て、迂回路を通過して戻って来ました。途中の信号で彼らと離れたので、もう追って来ないと思います。夜ですしね。じゃ、真っ直ぐホテルに行きましょう」

ホテルにチェックインできたのは10時少し前だった。既に飛行機で夕食を済ませていたので、チェックインが済むと直ぐに、鷺山と別れた。4人は翌朝7時15分にレストランで会う約束をして、全員そのまま部屋に向かった。部屋に入ると、賢はシャワーを浴びてベッドに身を投げ、そのまま横になっていた。次第に危険な領域に引き込まれてゆく自分を意識していた。ドアをノックする音がした。小塚と長谷部が入り口に立っていた。

「リーダー、少しお話しさせていただけますか？我々は自分たちの不手際と、不注意でリーダー達に大変ご迷惑をおかけしていると思います・・・」

「まあ、中に入って。田辺さんも呼ぼう」

賢は二人を部屋に入れると、梓に電話した。梓が直ぐにやって来た。まだ、サリーを身に着けたままだった。

「どうしたのですか？」

梓は、部屋に入ると、そこに小塚と長谷部が居るのに驚いたようだった。

「うん、彼らが話しをしたいようなんだ。じゃ、君たちの話を聞こうか」

「はい、リーダー達にご迷惑をおかけしてしまったのも、僕らが事情をよく理解していないからだと思うのです。どうして、追われているのか教えていただけませんか？」

長谷部が真剣な顔で聞いた。

「分かった。実は、彼らは売春組織の者達だと思うんだ。インドと中国

に拠点があるんじゃないかな。一月前、僕たちがインドに視察に来たとき、インドで2、3の売春宿が爆破された。それをやったのが日本人、それも男女のペアだと彼らは考えているようだ。彼らはそれをやった者に仕返しをしようとしているようだ。もしかしたら、また爆破や攻撃されるのを恐れて、事前に阻止しようとしているのかもしれない。いずれにしても、日本人のカップルが狙われている。我々もその条件に合致している様に見える。二人で行動しているときに追跡され始めたようだ。だから、デリーでは、我々は服装を変えて、サングラスを掛け、一見インド人と間違えるように変装した。その所為で、君たちにとぼっちりが行ってしまった。あの手の男達は、気楽な雰囲気接近して来るので、うっかりすると、簡単に罠にはまってしまう。それで、君たちに何度も注意を促していたんだ」

小塚が言った。

「そうでしたか。やっと筋道が分かりました。特に先ほどの、空港から出た後の行動は、なぜ、もう一度空港に戻るのか分からず、自分たちが何をしているのかさえも分からなくなりました。つまりは、僕たちが囮のようになって、相手を誘い出して、撒いてしまうということだったんですね」

「そう、済まないとも思ったが、君たちが奴らと接点を作ってしまったから、ああするのが一番いいと考えたんだ。直接被害を被る危険性はほとんど無かったからね」

「さすがに、リーダーです。やっと分かりました」

梓も頷いた。

「そうだったんですね。あのまま全員が車に乗ったら、君達の話した観光旅行という話は嘘だと思って、わたくしたちのことも疑いの目で見ろ。その挙げ句、彼らはわたくしたちに気付いてしまう危険性があったんですね」

「うん。じゃ、二人とも、もういいね。ゆっくり休んで、疲れを取れよ」二人は、挨拶をすると自分の部屋に戻って行った。賢は部屋のドアをロックした。

「梓、サリーが似合うな。インド人みたいだ」

「あら、わたし、そんなに色黒になっちゃったかしら？」

梓は、自分の腕を少し上げてしげしげと見つめた。賢が梓に2、3歩近づくと、梓は下を向いて言った。

「わたし、まだシャワーを浴びてないの」

「梓、ここで浴びたらいい」

「え、ええっ・・・少し待っていてね」

梓はバスルームに向かった。暫くして、梓はバスローブに身を包み、濡れた髪にタオルを捲いて賢の前に現れた。

「サリーの着方、難しいわね。身体を締めすぎていたみたい。やっと解放されたって感じよ」

賢は梓の肩に手を廻した。梓は目を閉じた。

翌朝、梓はオレンジ色のシャツに、灰色のロングパンツを履いていた。賢は、白いTシャツに紺のズボンである。レストランで顔を合わすと、梓は下を向いたまま

「おはようございます」

と言った。賢が挨拶をすると、梓は賢の後に附いて席に向かった。

「梓、今朝はスポーティな感じだな」

「あなた、山に行くようなこと言ったでしょう」

「はっはっはっは、泰山のことか。登山する訳じゃない」

「でも、登るんでしょう？」

「あそこまでは遠隔移動するつもりだよ。でもまあ、少しは登ることになるかもしれないな」

梓はまた、空中を飛行できることを思って、胸躍る思いになった。ふたりがバイキングの料理を取って席に着くと、小塚がやって来た。

「おはようございます。早いですね。今日は白霧館に行くんですけどね。ここから近いんでしょうか？」

賢が応えた。

「おはよう。そうだね。今日は白霧館だね。道士の修行の様子を伺って、

唯物的な社会の中で、道教をどのように捉えているか、その辺りを探ってみたいね」

賢はそう言いながら、梓の方を伺った。梓は予定を勘違いしていたことに頬が熱くなった。自分は どうしてしまったのだろうと思った。

「泰山には明日行くのですね」

梓は念を押すように言った。小塚が食事を取りに立った。

「そうだね、明日でも、今日でも、可能性があるときに移動しよう。今日か、明日かは不確定だし、空間も意味をなくすからね」

梓は賢が自分をからかっていると思った。しかし、賢は真面目に話していた。長谷部がやってきた。

「おはようございます。リーダー今日の予定は、泰山ですか？それとも白霧館ですか？」

「おはよう。泰山にしようかな。でもアポイントメント次第だね」

梓は、頭が混乱してきた。

「リーダー、今日は白霧館じゃないのですか？」

「君は泰山のつもりだろう」

「さっき、白霧館っておっしゃっていましたが、わたし、混乱してきました」

長谷部は料理を取りに立った。

「長谷部君、料理を取りにいったらどう？あれ、もう行ったのかしら？」梓は自分の頭がどうかしてしまったような気がしてきた。賢が穏やかに話した。

「梓、今日は仙道にも通じる道教の総本山を訪れるつもりだ。あまり、予定にこだわらない方がいい。途中で時空間を無視するつもりだから、予定は不確定のままだ。期待することで固定させないようにしているんだ。混乱させてごめんね。君の頭は可笑しくなんかないよ」

梓はほっとした。4人は食事を済ますと、ロビーで鷺山を待った。鷺山は8時丁度に来た。エネルギッシュな感じを4人に与えた。挨拶の言葉が身体に心地よく響いてきた。全員同調するように挨拶した。

「皆様よく休まれましたか？今日は先ず市内の白霧館に行ってみまし

よう。事前にお願いはしてありましたが、一応先ほど副館長のアポイントメントを再確認しました。精神性の改革のために日本から道教の教えを調べに来たと言いましたら、待っているとおっしゃってくれました。副館長さんは“精神性の改革”という言葉に興味を持たれたようです。もう食事を済ませられましたか？」

賢が応えた。

「ええ、もう出掛けるばかりです。おかげさまで今朝は全員快適な朝を迎えることができました」

「それはよかったです。では、早速白霧館に行ってみましょう。開館は8時半ですから、少し時間があります。北京の市内を車で廻ってみましょう。天安門広場やオリンピック・スタジアムなんかも外側からだけでも見てみましょう。皆さん、北京は初めてですか？」

全員頷いた。鷺山はホテルを出ると、市内をぐるりと一周した。天安門広場の前を通ったとき、賢は場の異様な雰囲気を感じた。霊的に不安定な感じがした。8時30分ぴったりに白霧館に着いた。ゲートを入ると鷺山は直ぐに事務所向かった。副館長が事務所に来ている、一行を迎えてくれた。頭部の毛が薄く、中肉中背の50歳ほどの風貌だが、目鼻立ちが整っていて、とても若々しく感じる。その柔らかな物腰は、会っただけで、気持ちが落ち着いてくるような感覚を4人に与えた。副館長は早速4人を小部屋に案内した。小部屋にはソファと小椅子があって会合ができるようになっていた。副館長は席に座るように案内すると、全員に向かって話し始めた。

「大家好、歡迎您！我是副主任劉曉明。你們知道道教嗎？神道和道教是相似的。」（こんにちは、ようこそおいでくださいました。わたくしは副館長の劉曉明です。皆さんは道教をご存じですか？神道と道教は似ているのですよ）

鷺山が通訳した。鷺山が4人に向かって

「ウォシーの後に名前を言えば自己紹介になります」

と言ったので、全員が自分で自己紹介をした。しかし、どうやら日本名をそのまま発音したのでは通じていないようだった。鷺山はそんなこと

には頓着せずに副館長に向かって言った。

「*****」(今日は我々の願いをお聞きいただき、ありがとうございます。ここにいる人たちは、日本から道教の精神性について、教えていただくために参りました。よろしく願います)

鷺山が賢に何か言うように促した。

「わたくしたちは、いま、世界中の不安定な社会情勢が、精神的な安定性の欠如から来ていると考えて、それを改革すべく取り組んでいます。まず、人々が自然と共に生きる生き方を捨て、周囲の便利さのみを求めるようになってきている点に着目して、その改善を図ろうと考えています。今日は、唯物主義的な社会形態を取っている中国で、道教はどのように人の生のあり方を指導しているのかを、お教えいただけたら幸いと思っています」

賢の言葉を鷺山が通訳すると、副館長は軽く頷いて言った。

「*****」(自然の原型は人間の外側ではなくて、内側にあるのです。道教はその内側を整えることを教えているのです。だから、外側の社会が唯物的な形態を取っていても、何ら影響を受けないのです。外側は内側で生まれたものを映し出した世界です。そのことは同時に、外側の現象を実証的な見方で判断する社会からも、受け入れられるのでしよう。内側の原因と外側の結果のバランスが取れていれば、社会はうまく機能します。道教は、儒教を除けば、中国で生まれ育った唯一の宗教なのです。しかし、道教そのものは文化大革命の時代に大弾圧を受けました。精神的なものはすべて否定されました。道教の神像はことごとく破壊され、道観は文字を削られ、兵舎や倉庫などに転用され、当時の聖人達はほとんど、姿を消してしまいました。太古の昔から累々と築き上げてきた人々の心の支えを破壊してしまったのです。4人組が打倒されてから、外観は漸く修復されてきましたが、それはそう簡単に元には戻りません。それが、今この国に社会的な不均衡を生んでいる最も大きな原因です」

鷺山は言葉を見つけながら、ゆっくり通訳した。副館長がいきなり、現在の中国が社会的に不安定である原因について話しをしたので、賢と梓

は道教には偏りのない、自然な発想があるのだということを見て取った。さすがに、過去に人民党が道教を迷信と位置づけて、民間から排除しようとしたことは、具体的に口には出さなかった。それは、過去の弾圧を蒸し返すことで当局が敏感に反応することへの警戒と、現在の人民党が、旧文化の中からも、取り入れるべき所は取り入れようとする姿勢に、変化してきたためなのだろうと賢は考えた。真剣な面持ちで話しを聞いていた梓が質問した。

「道教の教えは、極めれば仙人にでもなれると聞いていますが、今でもそんな修行をしている人たちがいるのでしょうか？」

副館長は梓の方を見て微笑んでいたが、鷲山が通訳すると、笑いながら応えた。

「****」鷲山：（簡単な修行では、仙人にはなれないのですよ。道に精通して、火に入っても、水に入ってもそれに影響されない、よく云われる超能力を持っていて、永遠に年取らない存在が仙人なのです。そんな存在になるには、先ず独身のまま、世間から離れ、常に瞑想状態で生きる生活をしなくてはならないのです。常に正しい呼吸をし、規則正しい生活をし、その上、いくつかの特殊な気や肉体を制御する術を憶え、実行しなくてはならないのです。植物だけを食する辟穀法、生命の気を自由に操り、取り入れる胎息法、身体の関節や筋肉を縦横に動かして体液の循環を制御する導引法、仙人の薬、仙薬を作って服用する煉丹法、男女の交わりから精気を摂取する房中術、身体の各部位、細胞にまで神を観想する存思法、これらはどれ一つを取ってみても、達成できるようになるには数十年の年月が必要と云われています。しかも、それらがすべてできるようになったからといって、必ずしも不老不死になったり、超能力を身に付けられるわけではないのです。例えば、空を飛んだり、遠くのものを見たり、遠くの音を聞き分けたり、岩の中に入ったり、壁を抜けたり、水の上を歩いたり、火に入ったり、同時に100人の人の話を聞いたり、数万種類の色を見分けたり、ミクロのものを肉眼で見たり、宇宙の彼方の星の様子を伺ったり、瞬間に何千マイルも移動したり、幾ら修行を積んでも、必ずしも、このようなことができるよう

になるとは限らないのです。中にはその中の一つ、二つを実現できるようになる人もいたようですが、ほとんどの人は途中で挫折してしまったと云われています。今も、何百歳、場合によっては1000歳を超えるような年齢の人が存在しているとも云われていますが、そのような人に逢ったとか、見たという話も、そのことを証明する手段が無いので、真偽のほどは分からずに、夢のような話ということになってしまいます。これは道教から派生した現世利益の究極の探求でしょう。でも、そんなに長く生きて、どうするのですか？)

鷺山は副館長から紙とボールペンを借りて、難しい言葉は紙に書いて貰い、それを4人に示しながら説明した。小塚と長谷部は面白そうに聞いていた。梓は困ったように言った。

「わ、わたくしは、仙人になりたいわけではありません。ただ、泰山のような神山には、今も仙人修行をしている人たちが居るのかと思ひまして」

鷺山の通訳に答えて副館長が梓に向かって話し、鷺山が訳した。

「*****」鷺山：(分かっていますよ。確かに、現在も仙人を目指して、あるいは仙人になれなくても、超能力を得たいと思って、山に籠もる人が居るようです。でもわたしは一度も、自由に空を飛んだり、地中に潜ったりできる人を見たことはありません。目の当たりにすれば、わたしの考えも変わるかもしれませんが)

賢は、空中に浮揚したり、遠隔移動したりすることは修行で手に入れるようなものではないと思ったが、黙って聞いていた。梓も実際、超能力と云われる動作ができるようになったが、それが修行という言葉とどうしても結び付かなかった。小塚と長谷部は強い興味を示した。身を乗り出して話を聞いていたが、さすがに口を挟むだけの勇氣は無いようだった。副館長が言った話を鷺山が通訳した。

「*****」鷺山：(道(タオ)は見えるものと見えないものの根源的な原理で、それがエネルギーとして目に見える物質に働くとき、それを気(き)として捉えるのです。これは人の意識で誘導することのできるエネルギーで、意識そのものとも言えるものです。道(タオ)は宇宙

を統べる原理で、宇宙に遍満するエネルギーの総体です。それはこの世界を動かしている根本の力です。それが人の生においては、生きるべき道（みち）であり、自然の道理ともなってくるのです。道（タオ）は何ものかであり、何ものでもない。因果律に縛られず、しかし、因果律の形態を持って現れもする。実態として認識することはできないが、一体となることができる。時空を超えているが、時空に遍満している。それが道（タオ）なんです。つまり、道（タオ）とは形而上、形而下のいかなるものも一切をそこに包含する場なのです。だから、そこには、人間の意識の力や宇宙の神秘的な力を駆使して、何かを実現しようとする呪術的な修法が生まれる素地となっているのです。この道（タオ）の場はエネルギーである「気」に満ちていて、「気」が固く凝縮して物質となり、分解すればまた元のエネルギーである「気」に帰って行くのです。つまり、世界はこの「気」の一つの顕現の形態として存在しているのです。だから、この世界のものは、人間の意識によって、この「気」を制御して変容させることができるのです。そして、この世界は陰と陽のバランスの上で成り立っています。太古の聖人はこういうことを総合的に考え、息を整え、小周天や大周天という「気」の循環などの修煉で身体を浄化し、我々が「胎」と呼ぶ新しい存在を創造する方法を見出したのです。瞑想することで腹部に「道胎」という嬰兒を生み出す方法です。人はこの世に生を受けますが、この社会の中で生きるだけでは、まだ本当に自分自身として確立できていないのです。過去の聖人はこの「道胎」を生むことによって、心身共に浄化され、本来の自分自身に至り、初めて、創造のできる本来の人としての存在が確かなものになるとしたのです。そして、その「道胎」を数年から数十年養うことによって、「金仙」にまで育てるのです。これはふつうの人の行う道ではありませんが、その中に入って、意識を研ぎ澄ますことで、肉体の呪縛から抜け、あらゆる能力を手に入れることができるようになるのと謂われています。道「タオ」はこの世界に存在するあらゆる神仏をその中に包含しています・・・・・・如何ですか？これが「道教」の教えです。他の宗教の様な教義は持ちません。そして、確定する原理も持ちません。すべてはこの

道「タオ」の場から生み出され、道「タオ」に包含されているのです) 賢と梓は、道「タオ」の考え方が、表現は異なるが自分たちの捉えている世界と同じであるような気がした。そして、その時空間の不確定さは、次元を超えることで起きることだと思った。賢が梓に向かって言った。

「梓、劉さんのおっしゃることを次元に展開して考えられるか？」

「はい、あなた、完全ではないけど、タオの場は根源の自己の場で、そこから映し出される場がこの世界で、顕現された世界が多次元の世界だということを見つけるために、タオの道士は長い年月を連綿と鍛錬してこられたのだと思いました」

「その人達のこと、森羅万象も、虚空間も、生前・死後の世界も全て、自分自身の現れだということを理解するんだよ」